
土地分類基本調査

熱海・小田原

5万分の1

国 土 調 査

静 岡 県

1 9 8 5

序 文

本県では、健康で文化的な生活環境の確保と県土の均衡ある発展を図ることを基本理念として、人間性豊かな地域社会づくりを進めております。

このためには、限りある土地資源を適正かつ有効的に利用することが極めて重要な課題となり、基盤である県土の実態を総合的に把握することが必要となります。

さいわい、国土調査事業ではこれに対応する手段として、土地についての質的調査を土地分類調査、量的調査を地籍調査、水関係の量及び質的調査として水調査の三つの制度があり、この制度に基づき適正な土地利用計画を行うための基礎資料を作成しております。

本県においては、この制度を活用して土地分類調査を昭和39年度より19図幅、地籍調査を昭和28年度より1,015㎦の区域で調査を完了させ（58年度まで）、更に水調査についても昭和55年度から実施しております。

本来、国土調査事業は前述の三つの制度が足並みを揃えることにより、総合的にその機能を果たすものでありますが、今日までの実施状況は、その事業進度とあわせてかならずしもバランスのとれた充分なものとはいえません。特に地籍調査については、市町村における土地利用に関する諸行政の企画、立案、事業計画の策定、事業にともなう用地買収等の基礎資料として広範囲に活用され、望ましい計画の樹立と事業の円滑な実施、能率の向上と経費の節減に大きく貢献する調査であります。

また、土地分類調査については、すでに完了した19図幅及び今回とりまとめた熱海、小田原図幅等は、その地域における地形、地質及び土壌など土地に関する要素の特性を総合的に把握することによって地籍調査の活用をはかると共に、各種土地開発、並びに土地保全計画等の基礎資料として、市町村行政面に大きく貢献する調査であります。

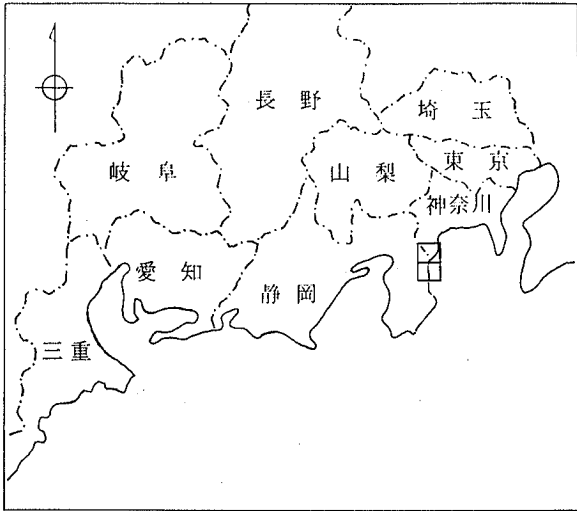
従いまして、本調査事業の進度アップが更に進展するよう、今後とも関係市町村各位の尚一層の御理解と御協力をお願い申し上げる次第でございます。

なお、本調査の実施に当たって、御協力いただきました関係各位に対し深く感謝申し上げますとともに、今後とも一層の御協力をお願いする次第です。

昭和60年2月

静岡県農地森林部長 小澤寅男

位 置 図



目 次

序 文

総 論

I 行政區画	1
II 人口	2
III 図幅内の地域の特性	6
IV 主要産業の概要	15

各 論

I 地形分類図	29
II 表層地質図	46
III 土 壤 図	48
IV 標高及び傾斜区分図	52
V 水系谷密度図	54
VI 土地利用現況図	56

ま え が き

1. 本調査の事業主体は静岡県であり、国土庁土地局国土調査課の指導をえて実施したものである。
2. 本調査の成果は国土調査法施行令第2条第1項第4号の2の規定による土地分類基本調査図および土地分類基本調査簿である。
3. 調査の実施、成果の作成機関および関係担当者は下記のとおりである。

総合企画集	静岡県農地森林部 農地企画課 "	技監兼 農地企 課係長 師	鈴木 譲 増田 雅宏 小田 伸一 高木 勝治
地形調査 傾斜区分調査 水系谷密度調査 表層地質調査	静岡英和女学院学 短 期 大 学 "	教 授	北川 光雄 "
	静岡大学理学部 "	教 授	土 隆 一
	"	助 教 授	黒田 直
	"	助 手	茨木 雅子
土 壤 調 査	静岡県農業試験場 "	化学部長 技 師	川口 菊雄 高橋 和彦
	静岡県林業試験場	研究主幹	縣 富美夫
	静岡大学農学部	教 授	加藤 芳朗
	東京農工大学農学部	教 授	浜田 竜之介
土 地 利 用 現 況 調 査	静岡県農地森林部 林 政 課 "	主 任	阿部 卓 本間 康弘
	静岡県農業試験場 "	化学部長 技 師	川口 菊雄 高橋 和彦
協 力	静岡県東部 農林事務所	主 任	土屋 泰宣
※ 実施年度	調 査		昭和58年度
	印 刷		昭和59年度

総

論

I 位置及び行政区画

1. 位置

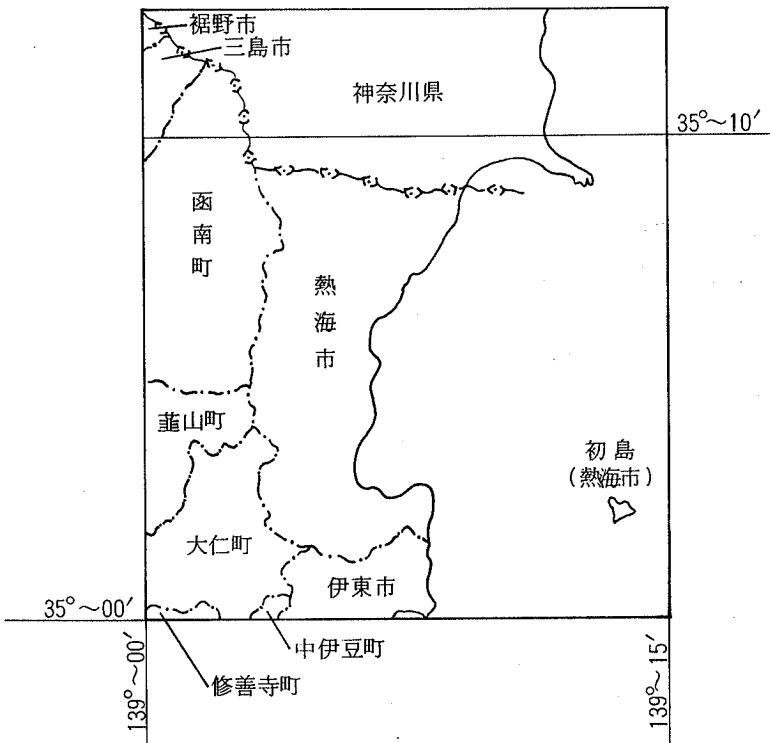
「熱海、小田原」図幅は、伊豆半島北東部に位置し、東側は相模灘に面し、中央部には箱根、十国峠、玄岳をへて巢雲山にのびる山地がひろがっている。範囲は東経 $139^{\circ}00' \sim 139^{\circ}15'$ 、北緯 $35^{\circ}00' \sim 35^{\circ}20'$ で、図幅内面積は、約 840 km^2 、このうち静岡県の陸地面積は、 145 km^2 である。

2. 行政区画

「熱海、小田原」図幅内に関する行政区は第1図に示す熱海市、伊東市、三島市、裾野市、函南町、菰山町、大仁町、修善寺町、中伊豆町の4市5町の9行政区である。

なお、市町村の面積及び図幅内占有率は第1表に示す通りである。

第1図 行政区図



第 1 表 図 幅

区 分 \ 市町村名	熱 海 市	伊 東 市	三 島 市	裾 野 市	
市町村全体面積 A (km ²)	62.43	124.20	61.81	137.82	
図幅内面積 {	陸地 B (km ²)	62.43	18.08	3.06	0.13
	構成比 (%)	43.1	12.5	2.1	0.1
B / A	100.0	14.6	5.0	0.1	

資料：市町村全体面積は、昭和54年度 全国都道府県市区町村別面積調
注) 図幅内陸地面積は5万分の1地形図(国土地理院発行)より計測

Ⅱ 人 口

1. 人口の動向

昭和55年10月1日に行なわれた国勢調査によると、本県の総人口は3,446,804人であり、また本地域における人口は339,556人である。

昭和40年からの人口推移をみると、23.8%の増加となっており、県全体の増加率18.3%を上まわっている。また、40年から50年までの増加率も、県全体(13.6%)より高い17.9%の上昇となっている。

その後50年から55年までの増加率は、県全体(4.2%)と同様に下がっており、5.0%の上昇にとどまっている。しかし、熱海、伊東といった東海岸地域においては、増加率0.2%となっており、他の地域との差がはっきり表われている。

これは両市とも観光地という立地条件が要因しているものと思われる。

次に年令別構成を昭和40年と55年について対比してみると、若年層である0才から29才までの人口が減少傾向を見せ、30才～44才、45才～64才、65才

内市町村面積

函南町	韭山町	大仁町	修善寺町	中伊豆町	計	備考
66.24	34.99	43.60	69.10	110.13	710.32	
31.43	7.12	19.17	2.02	1.56	145.00	
21.6	4.9	13.2	1.4	1.1	100.0	
52.7	23.2	47.3	2.9	1.4	21.3	

(国土地理院)による。58年版
した。

以上の人口が増加している。

本地域での0才～29才の人口を県全体と比較すると、昭和40年では、54.8%（県全体55.2%）であった。しかし、55年では、43.6%（県全体44.8%）で11.2%も減少しており、逆に、45才以上の人口比は、40年に22.8%が、55年では31.2%となり、8.4%の増加となっている。これによっても県全体と同様に、本地域での高齢化が進んでいることがわかる。

一方世帯数については、各行政区とも増加傾向にあり、昭和40年の66,685戸から、55年には105,988戸へと1.6倍の伸びを示している。

これに伴ない、1戸当りの家族構成は、昭和40年の4.1人から、55年の3.2人へと減少し、核家族化がみられる。

第 2 表 市 町 村 別

区 分		市町村名		熱 海 市	伊 東 市	三 島 市	裾 野 市
昭 和 50 年	人 口	男		23,447	32,263	44,610	19,257
		女		27,990	35,809	44,638	18,515
		計 (A)		51,437	68,072	89,248	37,772
	世 帯 数			16,662	20,776	26,496	9,228
昭 和 55 年	人 口	男		22,825	32,852	46,748	20,817
		女		27,257	36,786	47,864	20,208
		計 (B)		50,082	69,638	94,612	41,025
	世 帯 数			18,923	22,981	29,441	11,783
比 較 増 減	人 口	男	△ 622	589	2,138	1,560	
		女	△ 733	977	3,226	1,693	
		計	△ 1,355	1,566	5,364	3,253	
	世 帯 数		2,261	2,205	2,945	2,555	
人口伸び率 B / A				0.97	1.02	1.06	1.09

資料 : 国勢調査 (10月1日現在)

第 3 表 年 令 別

年度 区分	40 年				45 年			
	地域計	率	県 計	率	地域計	率	県 計	率
0~14才	67,410	24.6	776,319	26.7	69,850	23.8	765,233	24.8
15~29才	82,689	30.2	829,068	28.5	80,863	27.6	847,213	27.4
30~44才	61,400	22.4	639,189	21.9	69,264	23.6	714,966	23.1
45~64才	45,895	16.7	482,041	16.6	52,532	17.9	544,292	17.6
65才以上	16,891	6.1	185,904	6.3	20,434	7.1	218,191	7.1
合 計	274,285	100	2,912,521	100	292,943	100	3,089,895	100
世 帯 数	66,685		653,960		78,036		755,745	
人口増減率	—		—		106.8		106.1	
世帯増減率	—		—		117.0		115.6	

資料 : 国勢調査

人 口 及 び 世 帯 数

函南町	葦山町	大仁町	修善寺町	中伊豆町	計	摘 要
11,463	7,155	6,947	8,670	3,552	157,364	
11,653	7,541	7,053	9,200	3,713	166,112	
23,116	14,696	14,000	17,870	7,265	323,476	
5,975	3,803	3,855	4,594	1,611	92,723	
14,203	7,629	7,200	8,690	3,657	164,621	
14,546	8,069	7,418	9,031	3,756	174,935	
28,749	15,698	14,618	17,721	7,413	339,556	
7,769	4,302	4,109	4,893	1,787	105,988	
2,740	474	253	20	105	7,257	
2,893	528	365	△ 169	43	8,823	
5,633	1,002	618	△ 149	148	16,080	
1,794	499	254	299	176	13,265	
1.24	1.07	1.04	0.99	1.02	1.05	

人 口 の 推 移

50 年				55 年				備 考
地域計	率	県 計	率	地域計	率	県 計	率	
79,642	24.6	825,424	24.9	81,580	24.0	832,816	24.2	
76,799	23.7	802,041	24.2	66,450	19.6	708,801	20.6	
77,986	24.1	773,533	23.4	85,658	25.2	843,220	24.5	
63,703	19.7	646,944	19.6	74,782	22.0	749,185	21.7	
25,346	7.9	260,857	7.9	31,086	9.2	312,782	9.0	
323,476	100	3,308,799	100	339,556	100	3,446,804	100	
92,723		868,333		105,988		969,904		
110.4		107.1		105.0		104.2		
118.8		114.9		114.3		111.7		

Ⅲ 図幅内の特性

1. 地 勢

熱海図幅は伊豆半島北部の東海岸、相模灘に面する地域であり、千歳川をへだてて神奈川県域をふくんでいる。北部の箱根火山地から南方に湯河原、多賀、宇佐美火山と火山性山地の面積が広いが、火山体の浸食にともなって、基盤となっている第三紀中新世の湯ヶ島層群など非火山性の岩石が露出している地域もある。火山は更新世中期の活動によるものであるが、さまざまな溶岩や噴出物からなり、現在の地形はのちの破壊や浸食作用、構造運動の進展にともなって形成された結果であり、火山原形はほとんど失われている。しかし図幅中部から西方斜面にかけて緩斜面の丘陵性火山となり、溶岩流出や堆積にともなう原地形の残る場合もある。

十国峠から熱海峠、玄岳、山伏峠、巢雲山と南北につらなる稜線は伊豆半島を東西にわける分水界としてのびており、伊豆スカイラインがほぼ尾根にそって通っている。スカイラインからの展望は東西山地の非対称斜面をはじめ、火山噴出物、丹那断層にそう盆地群などめぐまれた景観をもち、火山学習の場ともいえる。稜線はカヤトともよばれる草原状をなすために眺望もよく地形を理解する点でもめぐまれている。早くから観光開発がすすんだために称斜面はゴルフ場、別荘地、レジャー施設などの建設のために人工改変が著しく、地域的変貌も急速であった。また、観光道路、ロープウェイなど交通手段も敷設がすすんだ。しかしそのような自然改変のために災害発生要因も加わり、防災的措置の必要な地点が多いし、水循環など環境の変化にともなう保全の対策も必要となってきている。

相模灘に面する海岸には、火山地がせまり海の波や沿岸流の営力で海食崖を示す海岸線の延長も長く、錦が浦、赤根崎、魚見崎など、岬端部や島嶼は観光地ともなった。湾入部には砂礫が堆積し、熱海海岸や多賀の海岸には砂浜が発達し、海水浴場ともなり、断崖絶壁の海岸と対照的である。海岸浸食による砂浜の消滅もみられたために人工海岸化し、防潮堤、養浜堤による対策も講じられた。また海岸ぞいにはビーチラインのような有料道路も建設され、自然海岸は失われてきた。海岸ぞいに伊豆山、熱海、多賀、網代と温泉地がつづき、重要な観光資源となっており、海岸線まで施設建築がすすんだ。

平坦な海岸ぞいの沖積地は少なく、和田川、大川、宮川、仲川、初川などの下

流や河口付近には扇状地性の低地があるが集落が立地し、平坦化による市街地化がすすみ、原形の復元は困難である。また山地から流出する河川の中下流域に沿っては、土石流的に押し出されてきた土砂礫が谷をうめ、階段状の堆積地形をつくる場合もみられる。緩傾斜の埋積谷は畑地、水田であったが、都市的土地利用が上流にむかっている。また山地斜面の傾斜地にも樹園地が広く農業の特色となっているが、みかん園は観光農業化もしている。

熱海図幅にふくまれる地域はこのように火山活動の積算によってその土地的基盤は形成され、のちの地殻運動や浸食作用によって変形してきた地域である。そして地震にともなう断層作用、豪雨にともなう山地災害や地すべりなどの浸食堆積作用は現在でも継続しており、ある場合には危険性をはらむといえる。人口の集中と都市的土地利用の発展、高層ビルの建設や土地の人工改変はその危険度をさらに増大させているともいえる。その意味で適正な土地利用と安全な地域開発のためには、さらに詳細な地形分類と土地条件調査の要請される地域とも考えられる。

2. 気 象

伊豆半島東部に位置する熱海は典型的な表日本式気候にぞくし、温暖多雨の気候をもっている。それは東は相模灘に面して黒潮の流れている海洋の影響をうけ、西は伊豆半島中央を南北にはしる稜線によって冬の西風がさえきられるので温暖な気候がもたらされるといえる。温暖な気候の証明として、熱海梅園の梅が日本一の早咲きであることで 11月下旬から咲きはじめ1月下旬には満開時となる。また桜も染井吉野が気候にもっとも敏感であるが、気温 12℃程度になった時に花が開きはじめ5日ほどで満開になるが、熱海では鹿児島とほぼ同時に咲きはじめるという。

このように伊豆は冬季に温暖な地域であり、温泉地であることもふくめて避寒保養地としての性格をもっている。網代の1月の平均気温は6.6℃であるが、東京4.4℃、高知5.2℃、宮崎6.8℃であり気温の上から南九州にほぼ相当する。4地点の年較差をみると網代が19.3℃で最も温和な状況を示している。またそのことは夏のしのぎやすさもあらわしており、避暑地としての役割もはたしている。

降水量を網代の資料によってみると1,918mmと多雨であり、6月の梅雨と9月の台風の時期に極値があらわれる。降水量の地域差をみると山地の観測点の資料に

よると標高 100 m ますごとに約 250 mm ほど降水量は増加するとみてよいといわれ山間部の降水はおおくなる。降雪はきわめて少なく雪日数は平均 6.3 日であるが積雪のみられるのは平均 2.0 日程度であり、10 cm 以上の積雪をみるのは 10 年に 1 回ぐらいである。市の花であるアタミザクラも 1 月下旬から咲く寒桜であるが、暖地性植物の分布からも、熱海の気候の特性を知ることできる。しかし、玄岳頂上北方にある氷ヶ池は冬に結氷する湖面をもつが、かつては水をきり出す池であったともいわれ、気候の地域差の大きさを示している。

第 4 表 気 象 表

単位 (温度 ℃
雨量 mm

区別	月別	観測所	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年平均
最高気温	網代	10.5	10.8	13.3	18.2	22.0	24.5	27.9	29.6	26.0	21.0	17.0	13.1	19.5	
	三島	11.0	11.6	14.3	18.9	22.8	25.6	28.9	30.6	27.3	22.3	18.1	13.6	20.4	
	伊東	10.6	10.8	13.6	18.6	22.6	25.1	28.8	30.1	26.7	21.2	17.3	13.1	19.9	
最低気温	網代	3.6	3.7	5.9	10.8	14.8	18.4	22.1	23.5	20.4	15.4	10.8	6.4	13.0	
	三島	0.5	0.4	3.4	9.0	13.0	17.9	22.0	22.6	19.0	12.7	7.1	9.8	11.4	
	伊東	3.3	3.5	5.8	10.6	14.7	18.4	22.4	23.6	20.7	15.3	10.7	6.1	12.9	
平均気温	網代	6.6	6.8	9.2	14.0	18.0	21.0	24.5	25.9	22.7	17.9	13.6	9.3	15.8	
	三島	5.0	5.8	8.7	13.8	17.8	21.5	25.0	26.1	22.7	17.1	12.2	7.3	15.3	
	伊東	7.0	7.2	9.7	14.6	18.7	21.8	25.6	26.9	23.7	18.3	14.0	9.6	16.4	
降水量	網代	69.0	80.7	134.0	164.4	194.0	262.6	205.6	213.0	235.7	189.2	102.7	66.8	1,918	
	三島	75	85	138	176	173	246	209	213	229	166	110	67	1,887	
	伊東	74	80	131	162	205	292	194	233	242	180	121	78	1,991	

資料：静岡地方気象台資料
三島、網代（1951年～1980年の30年平均値）
伊東（1941年～1970年の30年平均値）

3. 就業構造

本地域の昭和55年10月現在における産業別就業人口の比率は、第1次産業7.1%、第2次産業29.9%、第3次産業63.0%である。これを昭和50年とくらべると第1次が1.6%、第2次産業が0.5%、それぞれ減少し第3次産業は、8.7%増加している。

このように本地域の就業構造は、第2次産業はあまり変化なく、第1次産業の減少分を第3次産業が吸収して大きく増加していることがわかり中でも卸売り、小売業の伸び率が高くなっている。

また、昭和55年におけるサービス業の比率は、地域全体の28.3%で最も高く（県17.2%）、卸売、小売業が22.6%（県20.9%）でこれに続いている。これに対しかって高い割合を占めていた農業は、昭和50年の7.9%から更に減少して6.4%（県9.5%）にまで落ち込んでいる。

市町村別にみると、本地域の東部にあり図幅内面積の大部分を占めている熱海市、伊東市においては、第3次産業の比率が79%で著しく高く中でも卸売、小売業とサービス業66.8%にもなっており、ここからも観光が非常に重要な位置にあることがうかがえる。

一方、伊豆半島の中央部に位置する函南町、韮山町、大仁町においては第1次産業が平均12.4%と地域平均の7.1%を上まわっている。

これらの地域には立地条件を生かした田方平野の施設園芸農業、丹那盆地を中心にした酪農などが見られる。

なお、就業動向を総人口に対する比率で見ると、49.5%で県平均の50.6%をわずかに下まわっている。

第 5 表 産 業 分

分類 市町村	総 数	第 一 次 産 業				第 二 次 産 業		
		農 業	林 業	水産業	計	鉱 業	建設業	製造業
県 全 体	1,743,584	165,843	4,849	13,707	184,399	1,733	147,426	539,860
熱 海 市	27,578	550	21	367	938	9	2,498	1,263
伊 東 市	34,297	1,492	14	523	2,029	20	4,122	2,070
三 島 市	44,749	2,506	22	7	2,535	5	4,267	12,033
裾 野 市	19,910	1,112	52	3	1,167	2	1,550	7,775
函 南 町	13,351	1,516	3	19	1,538	2	1,388	3,380
韭 山 町	7,880	1,295	6	5	1,306	18	753	1,819
大 仁 町	7,339	658	12	6	676	8	746	2,309
修善寺町	9,032	705	20	7	732	13	823	2,228
中伊豆町	3,823	884	33	6	923	3	367	665
地 域 計	167,959	10,718	183	943	11,844	80	16,514	33,542

資料：国勢調査（昭和 55 年 10 月 1 日現在）

4. 観光と交通

a) 観 光

伊豆半島の基部東側に位置する本図幅内の地域は、富士、箱根、伊豆国立公園に含まれ、わが国でも有数な観光地のひとつである。

地域内は自然景観に恵まれ豊かな温泉や名所旧跡等多く存在し、昭和 58 年度の観光入込総数は 2,234 万人もあり、県全体の 39.1%に達している。

代表的な観光地としては、静岡県東端に位置し、相模灘に向ってひらける伊豆半島の玄関口としての熱海市がある。

ここは、源泉数 435 本毎分 1 万 6 千 ℓ の温泉が主力で温暖な気候と海と山の自然に恵まれ、交通の便もよい伊豆箱根温泉観光地の中核でもある。

永い歴史と秘話を今にとどめ、沖には、初島、大島の美しい景観を見ることが出来る断崖絶壁の錦ヶ浦、ケーブルを利用して山頂に登ると相模湾、駿河湾をはじめ、伊豆の山並を手前に遠く南アルプス連峰と麗峰富士が望まれる十国峠、国宝、重文を多数収蔵公開している MOA 美術館など観光資源が多く存在する。

類 別 就 業 者 数

業	第 三 次 産 業				分 類 不 能	構 成 比		
	計	小売業 卸売業	サービ ス 業	その他		計	第一次 産 業	第二次 産 業
689, 019	364, 781	299, 756	205, 109	869, 646	520	10. 6	39. 5	49. 9
3, 770	6, 990	12, 600	3, 276	22, 866	4	3. 4	13. 7	82. 9
6, 212	9, 123	12, 631	4, 296	26, 050	6	5. 9	18. 1	76. 0
16, 305	11, 321	8, 874	5, 701	25, 896	13	5. 7	36. 4	57. 9
9, 327	3, 026	3, 883	2, 503	9, 412	4	5. 9	46. 8	47. 3
4, 770	2, 601	2, 786	1, 655	7, 042	1	11. 5	35. 7	52. 8
2, 590	1, 443	1, 626	921	3, 980	4	16. 6	32. 9	50. 5
3, 063	1, 378	1, 430	791	3, 599	1	9. 2	41. 7	49. 1
3, 064	1, 662	2, 665	908	5, 235	1	8. 1	33. 9	58. 0
1, 035	415	1, 084	366	1, 865	0	24. 1	27. 1	48. 8
50, 136	37, 949	47, 579	20, 417	105, 945	34	7. 1	29. 9	63. 0

また、図幅西側にある函南町には、昭和5年の北伊豆地震によって地上に現われた丹那断層がある。

この他、レジャー施設として自然を生かした数多くのゴルフ場も散在している。

b) 交 通

本地域の交通は、国鉄東海道線を中心にして発達している。

主要な幹線としては、東側海岸沿いにある熱海から下田まで走る国道135号線、南伊豆の下田まで走っている伊豆急行鉄道に接続している国鉄伊東線が中心となる。

また、熱海から小田原に抜けるビーチラインも観光及び地域産業の動脈となっている。

一方箱根山から伊豆中央に延びている山脈を横切る県道熱海、函南線。わが国第1級の幹線道路である国道1号線。また、観光道路として山岳部を縦走している伊豆スカイライン。また、それに接続している大熱海観光道路（熱海新道）がある。

海上交通道路としての熱海港から観光を主とした初島、大島や伊豆諸島などへの航路が運行されている。

第 6 表 温 泉

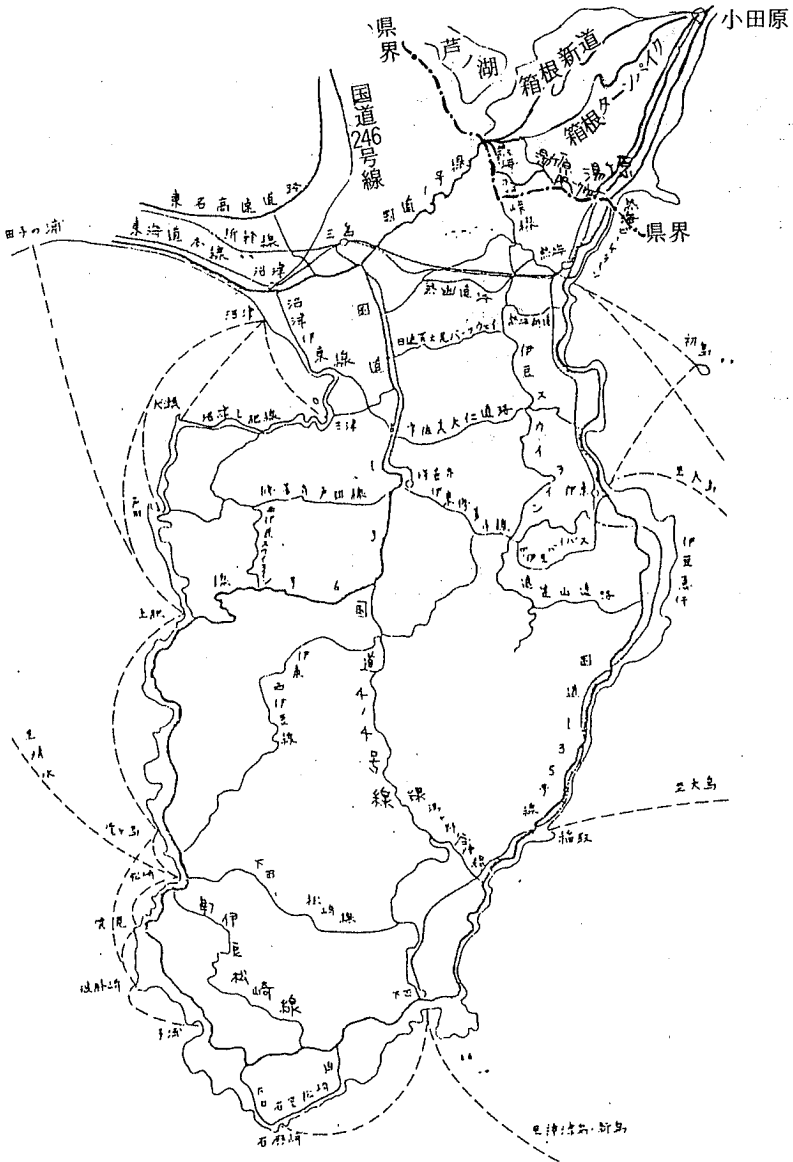
温 泉 名	所 在 地	平均温度	泉 質
泉	熱海市泉	35 ℃	単純温泉
熱海、伊豆山	〃 熱海	66	弱食塩泉
網 代	〃 網代	59	〃
宇 佐 美	伊東市宇佐美	54	石膏含芒硝泉
伊 東	〃 伊東	44	石膏含芒硝食塩泉
小 室	〃 小室	48	石膏含芒硝泉
対 島	〃 対島	46	単純温泉
白 岩	中伊豆町白岩	53	石 膏 泉
姫 の 湯	〃 姫の湯	32	単純温泉
柳 瀬	〃 柳瀬	36	〃
冷 川	〃 冷川	44	〃

資料： 県医務課調査

一 覽 表

温 泉 名	所 在 地	平均温度	泉 質
修 善 寺	修善寺町修善寺	61 °C	含芒硝食塩泉
新 修 善 寺	"		(未利用)
大 野	" 大野	56	石 膏 泉
大 仁	大仁町大仁	51	単純温泉
菲 山	菲山町南条	54	"
畑毛、奈古谷	函南町畑毛	32	"
竹 倉	三島市竹倉	14	鉄 泉
裾 野	裾野市茶畑	38	食 塩 泉
計	19 地 区		

第2図 伊豆の交通網



Ⅳ 主要産業の概要

1. 農 林 業

本地域の農業形態をみると、昭和50年の農業就業人口は、12,317人であったが、55年には10,718人になり、14.9%の減少になった。農家戸数は5年間で503戸（4.8%）減少している。また専業農家戸数については1,331戸で対50年比2.9%（39戸）の減少で、県平均4.4%の減少率を下まわっている。しかし第2種兼業農家はわずか1.6%の減少のみとなっており、戸数は全体の69.6%と高く、県平均（64.5%）を上まわっている。これは他地域と同様に農業人口が他産業へ移行し、これに伴ない農家の兼業化が進んでいるものと思われる。

一方耕地面積は、第7表の通り1戸当り0.52haで県平均0.6haをわずかに下まわっている。しかし、市町村別にみると三島市、函南町のみは県平均を上まわっており、他の市町村は0.38～0.59haの狭い面積である。

農業生産については立地条件の違いから、内陸部にある三島市、裾野市、函南町、韮山町、大仁町、修善寺町、中伊豆町と海岸線沿いの熱海市、伊東市を比較すると第9表にみられるように、内陸部では、米、野菜が多く生産され、海岸沿い地区では温暖気候を利用して果実栽培が多くなっている。

昭和53年の総粗生産額は24,042百万円、昭和58年は25,688百万円となっている。

なお、農家一戸当りの生産額としては2,577千円で、県平均2,516千円とほぼ同額であるが、海岸部の熱海市、伊東市においては1,550千円と少なく、県平均を大きく下まわっている。このことからこれらの地区では農外収入に依存せざるを得ない状態である。

作物別生産額の割合は、「畜産」が第1位で42.2%、第2位が「野菜」の31.5%、3位は「米」の9.4%となっており、生産地別には、韮山町のいちご、立地条件にめぐまれた函南町の酪農と三島市の養豚があり、また海岸部の温暖気候を生かし観光農園施設もあるみかん栽培などがある。

本地域は、温暖で良好な自然環境、また県内有数の観光地という立地条件を生かした農業生産の向上が今後の大きな課題であろう。

第 7 表 専 業

区 分	総 農 家 数			専 業 農 家			第 1 種 兼 業	
	昭 和 50 年	昭 和 55 年	対 50 年 比	昭 和 50 年	昭 和 55 年	対 50 年 比	昭 和 50 年	昭 和 55 年
静 岡 県	140,127	132,037	94.2	17,436	16,665	95.6	36,069	30,154
熱 海 市	658	678	103.0	34	48	141.2	117	65
伊 東 市	1,647	1,497	90.9	194	200	103.1	328	239
三 島 市	1,548	1,472	95.1	308	294	95.5	394	366
裾 野 市	1,720	1,669	97.0	102	95	93.1	276	266
函 南 町	1,083	1,024	94.6	243	221	90.5	314	241
韭 山 町	924	893	96.6	189	185	97.9	235	236
大 仁 町	794	694	87.4	85	81	95.3	130	83
修 善 寺 町	1,069	1,049	98.1	58	68	117.2	144	104
中 伊 豆 町	1,027	991	96.5	118	100	84.7	146	130
地 域 計	10,470	9,967	95.2	1,331	1,292	97.1	2,084	1,730
構 成 比	100.0	100.0		12.7	13.0		19.9	17.4

資料：農林業センサス（昭和55年2月1日現在）

第 8 表 農 用 地 面 積

区 分	県 全 体		熱 海 市		伊 東 市		三 島 市		裾 野 市	
	(ha)	構成比	(ha)	構成比	(ha)	構成比	(ha)	構成比	(ha)	構成比
1. 農用地面積	108,429	13.9	527	8.4	1,023	8.3	1,461	23.7	1,232	8.9
田	40,670	5.2	0	0	41	0.3	530	8.6	463	3.4
畑	67,759	8.7	527	8.4	982	8.0	931	15.1	769	5.5
2. 森林面積	504,313	64.9	3,926	62.9	7,022	56.5	2,660	43.0	8,938	64.9
民 有 林	408,825	52.6	2,851	45.7	6,996	56.3	2,657	42.9	7,680	55.7
国 有 林	95,488	12.3	1,075	17.2	26	0.2	3	0.1	1,258	9.2
宅地その他	164,560	21.2	1,790	28.7	4,375	35.2	2,060	33.3	3,612	26.2
行政面積	777,302	100.0	6,243	100.0	12,420	100.0	6,181	100.0	13,782	100.0

資料：1. 行政面積は建設省国土地理院「全国都道府県市町村別面積調」
 2. 農用地及び宅地、その他の面積は、県市町村課「固定資産に関する調査」による。
 3. 森林面積は県林政課「静岡県林業統計要覧」による。（昭和

兼 業 別 農 家 数

農家	第2種兼業農家			經營耕地面積				
	対50年比	昭和50年	昭和55年	対50年比	田	普通畑	果樹園	茶園
83.6	86,622	85,218	98.4	0.34	0.13	0.41	0.30	0.60
55.6	508	565	111.2	—	0.21	0.36	0.01	0.38
72.9	1,125	1,058	94.0	0.21	0.12	0.37	0.08	0.44
92.9	846	812	96.0	0.39	0.42	0.19	0.26	0.71
96.4	1,342	1,308	97.5	0.25	0.28	0.12	0.04	0.48
76.8	526	562	107.5	0.37	0.47	0.14	0.13	0.79
100.4	500	472	94.4	0.50	0.13	0.14	0.11	0.59
63.8	579	530	91.5	0.26	0.25	0.16	0.08	0.51
72.2	867	877	101.2	0.28	0.11	0.17	0.06	0.44
89.0	763	761	99.7	0.29	0.06	0.09	0.03	0.39
83.0	7,056	6,945	98.4	0.32	0.23	0.19	0.09	0.52
	67.4	69.6						

及 び 森 林 面 積 の 概 要

函南町		蕪山町		大仁町		修善寺町		中伊豆町		地域計	
(ha)	構成比	(ha)	構成比	(ha)	構成比	(ha)	構成比	(ha)	構成比	(ha)	構成比
1,130	17.1	748	21.4	545	12.5	694	10.0	591	5.4	7,951	11.2
378	5.7	483	13.8	201	4.6	315	4.6	330	2.9	2,741	3.9
752	11.4	265	7.6	344	7.9	379	5.4	261	3.7	5,210	7.3
3,634	54.9	1,860	53.2	2,738	62.8	4,762	68.9	9,302	84.5	44,842	63.1
3,634	54.9	1,660	47.4	2,397	55.0	4,245	61.4	6,578	62.9	38,698	54.5
0	0	200	5.8	341	7.8	517	7.5	2,724	20.2	6,144	8.6
1,860	28.0	891	25.4	1,077	24.7	1,454	21.1	1,120	10.1	18,239	25.7
6,624	100.0	3,499	100.0	4,360	100.0	6,910	100.0	11,013	100.0	71,032	100.0

による。(昭和54年10月1日現在)

する概要調査」による。(58年度版58. 1. 1)

59年1月31日現在)

第 9 表 主 要

区 分		県 全 体		熱 海 市		伊 東 市		三 島 市		裾 野 市	
			構 成 比 %		構 成 比 %		構 成 比 %		構 成 比 %		構 成 比 %
農業生産額		332,291	100	797	100	2,576	100	7,131	100	2,291	100
耕 種	全 体	224,607	67.5	637	80.0	1,283	49.9	3,702	51.9	1,566	68.2
	米	30,630	9.2	—	—	39	1.5	472	6.6	351	15.3
	野 菜	75,075	22.6	67	8.4	277	10.8	2,309	32.4	567	24.7
	果 実	23,741	7.1	379	47.6	446	17.3	43	0.6	10	0.4
	花 卉	13,657	4.1	—	—	58	2.3	156	2.2	372	16.2
	その他	81,504	24.5	191	24.0	463	18.0	722	10.1	266	11.6
畜 産	全 体	84,322	25.5	153	19.2	1,280	49.6	3,402	47.7	708	30.9
	乳用牛	16,498	5.0	54	6.8	19	0.7	979	13.7	82	3.6
	肉用牛	10,770	3.2	41	5.1	173	6.7	325	4.6	37	1.6
	豚	26,763	8.1	57	7.2	853	33.1	1,926	27.0	285	12.4
	鶏	29,571	8.9	—	—	214	8.3	143	2.0	293	12.8
	その他	720	0.3	1	0.1	21	0.8	29	0.4	11	0.5
養 蚕 加 工 物	23,362	7.0	7	0.8	13	0.5	27	0.4	17	0.9	
椎 茸	乾(t)	716.6		—		9.1		4.4		0.4	
生産量	生(t)	2,603.0		—		62.4		53.0		7.0	

資料：静岡県農林水産統計年報による。（計算期間 昭和58年1月1日か

注）：椎茸生産量については静岡県林業統計要覧による。

（昭和57年12月31日現在、生産額が明確でないため、参考とし

農 業 粗 生 産 額

(単位：百万円)

函 南 町		葦 山 町		大 仁 町		修 善 寺 町		中 伊 豆 町		地 域 計		摘 要
構成 比%		構成 比%		構成 比%		構成 比%		構成 比%		構成 比%		
4,469	100	3,373	100	1,621	100	1,403	100	2,027	100	25,688	100	
2,327	52.2	2,662	78.9	739	45.5	710	50.7	1,082	53.4	14,708	57.3	
369	8.3	428	12.7	193	11.9	284	20.2	274	13.5	2,410	9.4	
1,617	36.2	1,889	56.0	418	25.8	259	18.5	701	34.6	8,104	31.5	
34	0.8	17	0.5	28	1.7	42	3.0	44	2.2	1,043	4.1	
27	0.6	273	8.1	15	0.9	12	0.9	—	—	913	3.6	
280	6.3	55	1.6	85	5.2	113	8.1	63	3.1	2,238	8.7	
2,136	47.7	708	20.9	872	53.8	673	48.0	919	45.3	10,851	42.2	
1,398	31.3	247	7.3	621	38.3	365	26.0	102	5.0	3,867	15.1	
68	1.5	42	1.2	44	2.7	37	2.6	118	5.8	885	3.4	
275	6.2	276	8.2	157	9.7	95	6.8	227	11.2	4,151	16.2	
385	8.6	126	3.8	49	3.0	171	12.2	456	22.5	1,840	7.2	
10	0.1	14	0.4	1	0.1	5	0.4	16	0.8	108	0.4	
6	0.1	3	0.2	10	0.7	20	1.3	26	1.3	129	0.5	
0.5		3.8		10.3		61.3		125.3		215.1		
15.0		40.0		10.8		314.0		137.0		639.2		

ら同年12月31日までの1年間)

て生産量のみ記載)

2. 漁 業

本地域の東側にある熱海市、伊東市は相模灘に面し、海岸線もリアス式であり、良港が発達している。

特に熱海、網代、初島と名をつらね7の漁業区があり、いずれも伊豆七島周辺、房総半島沖の好漁場を背景に発達した近海漁業が主体である。

昭和57年の各漁業地区における経営体数は表に示すとおり277であるが、その内の94.2%は個人経営で、更にその75.5%が漁業を主及び従とする兼業者である。

水揚量は、17,245 tであり、その内訳として、そうだがつお、いわし、あじ、さば等の漁類が96.5%を占め、これにエビ、イカ等の水産動物類が2.5%でつ

第10表 漁業経営体数

漁業地区		経営体数 合計	経営組織別経営体数			
			個人	会社	漁業協同 組合等	共同経営
静岡県	全体	4,340	3,977	131	28	204
熱海市	初島	42	41	—	1	—
	熱海	38	36	1	—	1
	網代	50	46	4	—	—
伊東市	宇佐美	30	28	1	—	1
	伊東	54	52	1	1	—
	川奈	20	18	1	1	—
	対島	43	40	1	2	—
地域計	7	277	261	9	5	2
比率		100.0	94.2	3.3	1.8	0.7

資料：静岡県農林水産統計年報による。(昭和57～58年)

づいている。

地域別にみると、熱海市では、熱海、網代港を中心にして、3地区があり、また、伊東市には、伊東、宇佐美港があり、ともにいわし、あじ、さば類を求めて伊豆七島、房総半島あたりの漁場が主体となっている。

しかし、最近は、熱海市をはじめとして、沿岸漁業の不振や若年従業者を含めた漁業関係者の不足から、かつての漁業の町としての面影は薄れつつある。

本地域には観光地が多くあり、それと結びついた水産業の発展、開発を今後は行っていく必要があるだろう。

の内訳及び水揚実績

専業別個人経営体数			水揚実績 (単位: t)				
漁業のみ	漁業が主	漁業が従	魚類	貝類	水産物類	海藻類	合計
428	1,702	1,847	232,865	8,303	14,673	1,809	257,650
—	10	31	14	23	7	24	68
9	14	13	280	4	21	1	306
17	24	5	2,233	2	42	—	2,277
10	13	5	2,974	6	22	—	3,002
26	21	5	10,445	32	38	—	10,515
—	17	1	425	8	58	20	511
2	24	14	280	45	239	2	566
64	123	74	16,651	120	427	47	17,245
24.5	47.1	28.4	96.5	0.7	2.5	0.3	100.0

3. 商 業

本地域の商業は、昭和57年において商店数10,249店、従業者数は33,365人、年間販売額5,207億円である。商業も海岸部の熱海市、及び伊東市と内陸部の市町村とは、大きな違いが出ている。海岸地域をみると、飲食店が1,770店で最も多く食料品小売業が1,125店でこれに続いており、合わせると62.1%（県平均51.6%）にも上っている。また、一般的に小規模で小売店の1店当り売場面積は、平均47㎡で県平均57㎡に比べ小さくなっている。

一方、内陸部の市町村をみてみると、飲食店が1,784店、食料品小売業が1,430店で合わせて57.2%となっており、県平均を少し上まわっている。また、小売店の1店当り売場面積は55㎡で、ほぼ県平均面積と同様である。これは、この地方の観光を主体とした特性が出ているものと思われる。

第11表 商 業

区分 市町村	商店数		売場面積		従業員数	
	54年	57年	54年	57年	54年	57年
	店	店	㎡	㎡	人	人
熱海市	1,919	2,079	41,313	42,690	5,879	5,946
伊東市	2,325	2,554	68,305	74,846	7,500	8,051
三島市	2,869	3,052	87,823	91,427	9,516	10,378
裾野市	604	629	20,355	25,021	2,082	2,260
函南町	453	543	22,789	19,943	1,453	1,895
韮山町	292	353	13,696	11,693	789	1,449
大仁町	388	439	13,611	12,556	1,200	1,450
修善寺町	501	495	15,645	17,959	1,595	1,660
中伊豆町	109	105	2,459	2,663	274	276
地域計	9,460	10,249	285,996	298,798	30,288	33,365
県全体	85,572	91,983	2,869,636	3,061,828	320,884	347,592

資料：静岡県商業統計調査（昭和57年6月1日現在）

次に年間販売額は昭和54年に比較して32.7%（1,284億7,400万円）の増額であるが、県平均の35.9%には及ばない。一店当りの販売額についても、昭和54年の4,147万円から5,081万円と22.5%の大幅な伸びを示しているが、県平均の26.4%より低くなっている。地域別にみると、熱海市、伊東市の海岸部における販売額の伸び率は、30.7%で内陸部の34.2%より低い。

このことから、本地域の商業は大きく海岸部と内陸部に分けられるが、特に海岸部においては、観光地的要素が高いことから今後も観光と産業をまじえた総合的な開発が望まれ、それに合った店舗の近代化を図っていくことが必要であろう。

の 概 要

年間販売額		1 商店当たり		従 業 員 1人当たり 年間販売額	摘 要
54 年	57 年	従 業 者	年間販売額		
65,323	83,635	2.9	40	1,406	
100,313	132,914	3.2	52	1,651	
145,980	187,732	3.4	61	1,809	
21,622	31,526	3.6	50	1,395	
15,705	26,534	3.5	49	1,400	
8,542	14,215	4.1	40	981	
13,638	17,988	3.3	41	1,240	
19,286	23,832	3.4	48	1,435	
1,898	2,405	2.6	23	871	
392,307	520,781	3.3	50	1,561	
7,145,460	9,708,895	3.8	105	2,793	

4. 工 業

本地域の昭和58年12月31日現在における事業所数は1,709箇所製造品出荷額は6,749億5,500万円で昭和54年に対して187箇所(12.4%)2,037億7,600万円(43.2%)の伸びを示しており、従業者数も8.2%増となっている。

これは県平均の箇所数7.4%増、出荷額35.5%増より、いずれも上まわっている。

図幅の半分以上(56%)を占める海岸部(熱海、伊東)は内陸部(他の市町村)と違い工場敷地に適する広い土地が少なく、交通の便に難点がある等の地理的な立地条件により大きな違いが見られる。

海岸部の経営規模は小さいものが多く従業者数1~29人の占める割合が97.3%(県平均92.7%、内陸部90.5%)もあり、30人以上はわずか12箇所(内陸部121箇所)でこの内100人以上の事業所はない(内陸部36箇所)。

第12表 事 業

区 分	事 業 所 数		従 業 者 規 模 別			
	54年	58年	1~29人		30人以上	
			54年	58年	54年	58年
市町村	ヶ所	ヶ所	ヶ所	ヶ所	ヶ所	ヶ所
熱海市	154	160	152	157	2	3
伊東市	274	279	264	270	10	9
三島市	494	553	441	495	53	58
裾野市	205	263	180	235	25	28
函南町	96	122	85	108	11	14
菫山町	84	86	81	82	3	4
大仁町	89	113	81	105	8	8
修善寺町	103	107	97	98	6	9
中伊豆町	23	26	22	26	1	—
地域計	1,522	1,709	1,403	1,576	119	133
県全体	30,466	32,709	28,232	30,316	2,234	2,393

資料：静岡県工業統計調査(昭和58年12月31日現在)

また、製造品出荷額を業種別にみると、熱海、伊東においては、食料品、木材加工品、家具製造が、57%を占め主力となっており、化学、金属等の工業は数少ない。

食料品の中には観光客のみやげ物ともなる魚のひらきなどの水産加工品4,668tが含まれ大きな比重をなしている。

また、産業分類別就業者数の構成比をみると、工業関係の第2次産業はわずかに16.1%（地域平均29.9%）しかなく工業の発達の遅れが目立っている。

一方内陸地域においては繊維、化学、機械等の大工場が多くみられるがこれも交通及び地形等の立地条件に恵まれていることが大きな要素と思われる。

以上のことから海岸地域は観光地という立地条件の中でこれに合った工業をいかにして促進していくかが今後の大きな課題であろう。

所 の 概 要

従業者数		製造品出荷額		摘 要
54年	58年	54年	58年	
人	人	研	研	従業員100人以上0ヶ所
999	1,058	7,250	9,455	
1,953	2,101	16,428	19,659	
10,561	11,122	161,135	217,382	
6,261	7,371	179,565	241,820	
1,425	2,113	16,305	29,336	
929	1,037	9,461	12,131	
4,452	4,108	64,832	124,299	
1,416	1,479	13,950	18,883	
267	195	2,253	1,990	
28,263	30,584	471,179	674,955	36
475,567	511,028	8,073,686	10,939,667	652

第 13 表 産業別事業所数、製造品

区 分	熱 海 市		伊 東 市		三 島 市		裾 野 市		函 南
	事業所	出荷額	事業所	出荷額	事業所	出荷額	事業所	出荷額	事業所
食 料 品	ヶ所 64	5,885	ヶ所 86	8,408	ヶ所 61	48,947	ヶ所 15	1,941	ヶ所 8
繊維・衣服	-	-	2	×	3	729	2	×	5
木材・木製品	6	349	9	963	12	1,677	11	1,046	4
家具・装備品	6	211	19	664	9	858	9	632	1
紙・印刷	10	×	19	1,258	34	6,378	5	×	2
化学ゴム	-	-	2	×	6	×	1	×	1
窯業・土石	4	1,434	4	3,071	5	1,455	10	2,182	5
金属製品	4	×	5	219	71	17,238	27	101,122	15
一般機械	3	306	3	217	73	88,539	18	2,276	13
電気機械	-	-	1	×	53	10,125	35	12,568	15
輸送機械	1	×	1	×	19	1,403	20	103,172	7
その他	3	164	10	×	26	×	25	13,745	6
計	101	8,846	161	18,238	372	215,690	178	240,996	82
構成比	9.1	1.3	14.6	2.7	33.7	32.3	16.1	36.0	7.4

資料：静岡県工業統計調査（昭和 58 年 12 月 1 日現在）

注）：×は秘匿のためその他に集計金額が記入してある。従って、産業別

出荷額の概要（従業員4人以上の事業所）

（単位：百万円）

町	韮山町		大仁町		修善寺町		中伊豆町		地域計	
	出荷額	事業所	出荷額	事業所	出荷額	事業所	出荷額	事業所	出荷額	事業所
2,951	ヶ所 2	×	ヶ所 6	714	ヶ所 4	307	ヶ所 3	156	ヶ所 249	×
×	-	-	1	×	-	-	-	-	13	×
545	5	225	1	×	6	739	2	×	56	×
295	4	209	1	×	2	×	1	×	52	×
×	1	×	4	×	4	×	-	-	79	×
×	-	-	3	×	-	-	-	-	13	×
1,194	-	-	5	878	5	2,327	-	-	38	12,541
×	8	1,614	14	6,781	17	6,843	5	×	166	×
1,074	6	1,289	10	1,190	13	3,346	-	-	139	98,237
11,589	13	5,624	15	69,205	11	421	6	722	149	×
838	5	2,244	4	709	2	×	3	56	62	×
×	5	×	7	×	6	×	1	×	89	×
28,924	49	11,815	71	123,785	70	18,389	21	1,962	1,105	668,645
4.3	4.5	1.8	6.4	18.5	6.3	2.8	1.9	0.3	100.0	100.0

の合計金額ではない。

各 論

I 地形分類図

1. 地形の概要

熱海図幅にふくまれる地域は、伊豆半島基部の東側にあたり、相模灘に面する伊豆の東海岸で、各種の火山性の土地をふくみ、地形の地域差も大きい。図の北部は千歳川を境界に神奈川県湯河原温泉の地域もふくまれるが箱根火山の南部にあたり、南にむかって湯河原火山、多賀火山、宇佐美火山とつづき、これらの火山地は沼津図幅、伊東図幅、修善寺図幅へと延長する。火山性山地が大部分であるが、浸食によって伊豆半島の基盤にあたる新第三系の湯ヶ島層群、第三紀の火山岩類などの露出する地域もある。

火山体は形式の時期、構成物質の多様性、形成後の変化の状況などさまざまな要因による地域差が地形に表現されている。(1)火山の原形を示すと思われる山地緩斜面と尾根の平坦面、(2)断層運動によって変位・変形をうけてきた火山山体の水系や山系、(3)傾動運動によって起因したと考えられる東斜面と西斜面との非対称性、(4)火山の爆発的活動にともなう破壊作用とカルデラ状の凹地の生成。(5)浸食作用による火山体の解体も山体の地殻運動の影響をうけて地域差をもち、選択的浸食作用の進行していること、などが注目される項目である。

十国峠から南にのびる稜線は熱海峠、玄岳、山伏峠、亀石峠、巢雲山へとつづくが、この尾根が伊豆半島基部を東西にわける分水嶺となっている。東流して相模灘にそそぐ河川には初川、和田川、大川、宮川、水神川などがあり、いずれも流域面積は小さく、比高が大きいため河口付近に小さい扇状地性低地を形成するにすぎず、いわゆる沖積平野の発達はすくない。また流路にそう谷ぞいは土石流的な堆積物がおおく、転石もみられる。河川の上流源流部は急傾斜の谷壁をなし、崩壊地形もみられ、多量の土砂礫を供給している。

西斜面の中腹には南北方向に断層が通るために西流する流路はその影響をうける。河川としては函南冷川、来光川、柿沢川、深沢川などがあり、東斜面の河川にくらべて流路延長は長く、流域面積も広い。火山体の斜面を浸食しながら西流し狩野川に合流するが、図幅にふくまれるのは上流部のみである。函南冷川、柿沢川、深沢川はそれぞれ盆地内に沖積地を発達させ、西側の山地をきって流出する。流路ぞいにも低地を形成し水田や畑地となり、その規模は小さいが山間における生産の場と集落立地の条件を与えてきた。

山系や水系を支配する条件としてこの図幅においてはこれまでの火山活動による建設と破壊の働き、また、浸食作用のほか、構造的な原因による作用が大きい。それは南北方向に通過する丹那断層と北西—南東系に平行する断層群の発達である。活断層として現在も動きをつづけるこれらの断層作用は、地形発達に大きな影響を及ぼしてきた。東斜面における火山体の変形にあたって作用し、西斜面における盆地群の形成、水系と流路の決定、水系や山系の変位にも作用したといえる。丹那断層の横ずれは900~1,100mに達すると考えられ、尾根の切断、風隙の形成、谷の延長の折れまがりなどにあらわれる。断層運動にともなう地震による変動は山くずれ、地すべりも多発させ、その積算としての斜面形の形成もみられる。小地形や微地形の特色を拾うと、これらの地変にともなう発生した場合も多く、構造地形的側面からのアプローチも必要な地域といえる。

断層の分布図はあとに図示してあるが、深沢川のように断層にそってのびる谷、断層が山稜を横切る時にみられるギャップの列など地形と断層との関係を丹念に拾わなければならない地域といえる。

相模灘に面する海岸に目をむけると海岸地形も種類が多い。山地や溶岩流が海にせまって海岸線をきめてきたが波食による海食崖が形成され急崖の延長も長い。大黒崎、魚見崎、赤根崎、大崎などの突出部は岬端性を示し、錦ヶ浦と付近の島嶼は溶岩や岩脈による選択浸食の結果である。また直線的な海食崖のつづく伊豆山や網代の海岸線にも特色があり、海の営力の大きさを知らされる。沖積地の面積がすくないために砂浜はすくないが、多賀や宇佐美では砂堤の発達により内側を閉塞して沖積地を堆積させたと思われる所もある。海岸は風景美をもつ箇所も多く、海岸ぞいの温泉地とともに観光化がすすみ、海岸地形の改変もおおく、自然海岸の長さは減少しつつある。

地形に関連して問題となるのは人工改変と災害との関係である。図幅内の緩傾斜地では宅地化、ゴルフ場等植生や地形の人為的変更にともなう自然環境の破壊も進行した。斜面の水循環はとくに大きな影響をうける条件であるが、防災的諸事項を想定した上での土地利用の適正化を考慮する必要のある地域である。

2. 地形地域区分

熱海図幅の地形について、海拔高度、起伏量、水系谷密度、傾斜区分、構成物質、地形面の特性、地域的なまとまりなどを基準にして次のような地形地域区分をおこなった。これらの区分にはとなりあう図幅の区分とも整合させるための配

慮もされている。

地形区分

- | | | |
|-------|-------|---------|
| I 火山地 | I a | 箱根火山地 |
| | I b | 十国峠火山地 |
| | I c | 多賀火山地北部 |
| | I d | 多賀火山地南部 |
| | I e | 宇佐美火山地 |
| II 低地 | II a | 熱海低地 |
| | II b | 多賀低地 |
| | II c | 宇佐美低地 |
| | II d | 丹那断層低地群 |
| III 島 | III a | 初島 |

3. 地形分類

I 火山地

I a 箱根火山地

本図幅の西北部をしめる地域を箱根火山地として区分した。地質図によると、来光川の谷を境にしてその北西部は箱根古期外輪山の安山岩質溶岩からなり、東南側は湯河原火山の安山岩質溶岩におおわれる地域である。しかし沼津図幅からの延長として、また地形的まとまりという点から、丹那断層と鞍掛山から南にのびる分水界とをつないだ線以西を箱根火山地と一括した。箱根峠から海岸をへて北西にのびる外輪山の稜線には火山礫や火山灰層が堆積して山頂平坦面を形成し、ゴルフ場や別荘地などに改変された範囲も広がっている。箱根火山の南西斜面は外輪山の斜面として裾野を南西方にのばし沼津図幅に広い面積をもつようになる。そしてその斜面はほぼ平行する浸食谷によって下刻がすすみ谷は深い流路をとる。また尾根の部分は広く平坦面として残り、火山灰もあつく堆積し畑地となっているし、地形的に丘陵性の特性を示す。そしてその地形は外輪山の原形の残存部とも考えられている。箱根火山一帯は構造運動の影響も大きい、箱根峠南方には火山斜面も横切る断層が2本存在し、ケルンパットの地形を示すことも指摘されている。

Ib 十国峠火山地

多賀火山の北につらなる火山体を十国峠火山地として区分した。十国峠を中心に東にのびる尾根にそい岩戸山一帯をひとつの地形的なまとまりのある単位としたため、地質図による火山区分とは一致しない。

多賀火山の北につらなる火山は地質図や伊豆半島火山の生成史では湯河原火山とよばれる成層火山であり、多賀火山の形成後にその活動を開始した火山である。

活動の時期は第四紀洪積世のほぼ中頃、噴火の中心は現在の湯河原町市街地付近と考えられ、基性安山岩、玄武岩などの溶岩と火山碎屑物を噴出した成層火山であり、円錐形をなしていた。箱根外輪山の鞍掛山から南にのびる稜線は十国峠で2分するが、東方の岩戸山をへて大黒崎に至る半円形の尾根が湯河原火山の旧火口が開析された火口にあたり、湯河原町にむかって開析された谷壁は急傾斜をなしている。そして谷壁斜面には伊豆半島の基盤をなす湯ヶ島層群、第三系の天昭山玄武岩類が露出しこれらは風化作用を著しくうけ、土壌化しているが、非火山山地として区分した。カルデラ状盆地の斜面末端には崖錐状堆積物がおおう部分も広く、千歳川ぞいには段丘地形もみられる。熱海市内では桃山付近から岩戸山南斜面をへて熱海峠にいたる線より北方の山地がこれらの火山噴出物によっておおわれている。また熱海峠から十国峠をへて北にのびる分水界から西の斜面では湯河原火山の噴出物が多賀火山をおおって西方の緩斜面の山腹を形成し、火山の原形を残すこともある。この地域は構造的に変位をうけている場合もおおい。北西—南東方向の断層によって北側または北東側がおちる運動を示し、北東に面し



十国峠北西斜面における断層地形
(久野 久(1965)による)

て断層崖を形成し凹面をむけた形をあらわしているし、尾根が切断される場合もある。また断層が尾根を横断する場合には湧水によって小さい湖を形成する例があり、十国峠北方のイモリヶ池、玄岳北方の水ヶ池はそれにあたる。湧水に関しては、断層面にそって形成された粘土層が地下水の帯水層となり、表層に水を

導いたと考えられている。

岩戸山東方の七尾から鳴沢にかけての緩斜面は山地にふくませたが地形的には河谷が土石流的堆積物によっておおわれた埋積地で、大規模な地すべり性崩壊によってもたらされた押し出し性物質といえる。河川はのちの下刻によって峡谷状の形をもつが、全体的には崩壊により形成された地形といえるし、土壌も集積している。

Ic Id 多賀火山地

地形区分図においては沼津図幅からの延長を考慮して多賀火山地を北部、南部と区分したが、地形的連続性もあるため本書では一括してその特色を記載する。

本図幅内において、熱海市街地西方から宇佐美西方までの山地を構成するのが多賀火山であり、円錐形の成層火山であった。多賀火山は、箱根、湯河原火山の南につづく更新世前半期中頃に活動をはじめた火山で湯河原火山より古く、噴火の中心は現在の熱海市街地南東の海中であったが、のちに上多賀付近に移動した。

山体の東半は浸食作用、火山作用、地盤運動などにより変形、破壊されているが、西半には緩斜面も広く、原形の保たれている部分も多い。熱海市西方の玄岳頂上から南にのびる稜線は、山伏峠にそって東方に湾曲し、さらに北東にむきをかえて網代に至る半円形を描くが、この尾根によってかこまれる谷壁斜面は旧火口壁が開析によって拡大された地形と考えられる。構成岩石は、安山岩や玄武岩質溶岩など流動性の大きい溶岩からなり噴出時期により地質的に6岩層に区別されている。凝灰岩類は風化して軟弱な黄色土となる場合もある。稜線から西方にかけては平行する緩斜面や平坦面がのびて丘陵性の地形を呈するが、流出当時の堆積地形を残しているともいえる。平坦面は畑地や森林であったが、人工改変がすすみ、ゴルフ場、別荘地も増加している。起伏量の小さい丘陵性の地形であり、浅い谷が原面を刻んだ谷底には火山砂礫層も堆積している。現況から旧多賀火山を復元してみると、その山麓直径は、底辺においておよそ25～30 kmに達する大規模な火山であったことも想像されている。

火山の発達についてみると、多賀火山は第三紀中新世の湯ヶ島層群を基盤にして陸上に噴出した火山である。まず安山岩質溶岩が爆発的に噴出した活動をおこし、溶岩を流出させ集塊岩を堆積させ、溶岩と火山砕屑物からなる火山体を構成させたが、火口は魚見崎付近といわれている。魚見崎から赤根崎にいたる相模灘にのぞむ急傾斜地には、第三系の湯ヶ島層群や初期の溶岩、熱海市街地周辺には第三

系の火山岩類が露出するが非火山性山地とした。そののちの活動は噴火口を移動しながら多量の溶岩を流出させて火山体を形成させていったが、熱海峠と熱海市街地北部とを結ぶ線以南の山地に現在では広く分布している。火山活動の末期に爆発的噴火をおこして爆裂火口付近の山体が破壊されたが、その位置が現在の東方の急斜面を形成し、火山角礫岩類の堆積をすすめた。このような末期の活動とのちの傾動、断層、浸食作用が東側と西側との対照的な地形をもたらすものとなったのであろう。傾動運動については、全体的に南東ないし東に傾く地盤運動をうけたようである。そのため東側の斜面は西側の斜面にくらべて浸食量も増加し、非対称山地の原因ともなった。また断層も、本図幅内には丹那断層をはじめおおくの活断層が知られているが、北西—南東系の断層も多く、山体の陥没や開析もそれに関係あるとも考えられる。

魚見崎、錦ヶ浦、赤根崎などは断崖絶壁の海食崖の地形をもち、比高も 100 m に達する所もあり、景勝地にもなっている。多賀火山初期の噴出物には岩脈も発達しており、この岩脈の選択浸食によって、海食崖とともに錦ヶ浦海岸には島嶼の発達もみられ、鳥帽子岩のような奇岩をふくむ名勝ともなっている。熱海や多賀低地をかこむ山地において第三系の火山岩類の分布する範囲は非火山の中起伏山地として区分した。

I e 宇佐美火山

宇佐美火山は本図幅の南部をしめ伊東図幅からの延長であり、沼津図幅にもその範囲はひろがる。宇佐美火山の原形は円錐形の成層火山で宇佐美湾あたりがその噴火口と考えられている。多賀火山と同様にその東斜面は開析がすすみ、浸食カルデラ状に浸食がすすんだ山地が相模灘に面する。そして西斜面はゆるやかな広い山体と裾野が残り、中腹には丹那断層が通過しており、山地は狩野川流域の低地までのびている。このような東西の非対称的な山形の存在は伊豆半島東側の火山体の特性であり、その形成には火山活動とともに浸食作用、地盤運動も関係している。東西斜面の境界が亀石峠から巢雲山にのびる稜線であり、伊豆スカイラインが通過しており、地形を観察することができる。またこの半円形の尾根は宇佐美火山の旧火口壁が開析されて後退した崖面をあらわしているといえる。それは火山岩層の傾斜からそのように推定されてきた。宇佐美火山は第四紀更新世初期（70～90 万年前）に噴出した火山であり輝石安山岩質溶岩と凝灰角礫岩からなる成層火山で、噴出物の厚さは 300 m ほどと推定される。亀石峠から長者原付

近ではこの火山の斜面上を多賀火山の溶岩がおおっていることから、多賀火山より古い時代にできた火山である。多賀火山からの延長としての西方の緩斜面の部分にはゴルフ場に改変され、斜面の開発がすすんでいる。

宇佐美低地の周辺の山地は宇佐美火山地として一括したが、浸食カルデラの谷壁には、第三紀層の湯ヶ島層群第三紀の火山岩である阿原田安山岩など宇佐美火山の基盤となっている地層からなる山地があり、非火山性山地としたが浸食作用の激しさを示す例といえる。また西斜面の長者原付近も宇佐美火山地であるが、山腹斜面の凹地の埋積による地形で、構造的運動による変形をおおくうけている。

図幅の南端に位置する巢雲山（580 m）は、浸食のすすんだ周辺の山地とは対照的な新しいドーム状の山形をもつ火山である。噴火口は頂上であったと考えられるが火口の凹地はなく玄武岩質溶岩と火山礫からなる。

II 低地

IIa 熱海低地

熱海の市街地をのせる低地は糸川、初川、和田川などの河川の堆積作用による沖積低地からなり、低地の分布は谷ぞいの埋積地によって上流方向にのびている。低地の主部は北方は汐見町東方の突出部と魚見崎とを結ぶ直径 1.5 km ほどの半円形の湾の奥に形成された低地で市街地化が進んでいるために原形は不明である。山地が急斜面でおちこむ地域を開析した河川であるため、沖積地はほとんど砂礫質地盤からなり河谷も埋積された低地であり、傾斜が大きい。堆積物も土石流的に押し出して堆積した様相を呈し、河床の状況からもそのことが想像される。市街地周辺の山地は急傾斜で低地にのぞむために、地すべり性崩壊による滑落崖と堆積物からなる地域もあり、被災の危険度は高い。また海岸にそっては国道と防潮堤の建設で海とへだてられたが、過去の地震に際には津波による被害をうけた災害史をもち、津波に対する防災対策が必要である。西山から土沢への谷、梅園から相ノ原、小嵐から和田山へと、各流路によって上流の急傾斜の埋積谷に団地の造成がみられるが、源流部の崩壊と土石流、埋積物の二次的移動による崩壊など過密化した開発には十分な防災的措置が考えられなければならない。低地の範囲として伊豆山付近の海岸ぞいの緩斜面地までふくませた。山地が海にせまる地域の山脚、山間の緩斜面の表層には崖錐性堆積物がのる場合もあり、小規模に複雑に浸食面と堆積面がいくつもむために一括して低地にふくませた。

IIb 多賀低地

多賀低地は大川流域に発達する上多賀の沖積地、宮川と仲川下流域に発達する下多賀の沖積地に区分される。また小山をへだてて水神川にそう網代も海岸ぞいに発達する沖積地である。多賀火山の東側の急斜面を開析して流下するこれらの河川は多量の土砂を搬出し山間を埋積した沖積地と海岸ぞいの砂堤を形成した埋積谷は礫質の地盤からなり、熱海や宇佐美の低地と同様に土石流的に流下し埋積した形跡がある。またのちの河川の下刻により、段化され小さい段丘状地形に変形する場合もあり、流路は下刻している。崖錐性扇状地性沖積地であり、樹園地が広いが、市街地化もすすんでいる。網代や多賀海岸では埋めたてによる造成、港湾整備も進化した。海岸線の湾入は半円形を示して、津波による被害をうけてきた。下多賀の沖積地は比較的広いが合流沖積地を形成して供給された土砂は河川が上流から浸食により運搬してきた物質とともに山腹斜面の崩壊による土砂供給も考えられる。河床には転石も多く、一時的な洪水時の流出量や搬出量の多かったこと、低地の形成に災害や洪水の影響の大きかったことなども推定される。

IIc 宇佐美低地

図幅の南部、相模灘に面する宇佐美低地は宮川、仲川、鳥川などの下流に形成された沖積低地で、伊東図幅からの延長部である。宇佐美火山の東斜面を開析する鳥川、仲川は亀石峠から巢雲山にかけての稜線下に源流をもち、急傾斜で宇佐美湾に流入するために、河口付近まで、大きな礫が河床に転石のような状況で堆積する。低地は海岸線と平行して走る砂堤列にそう砂質地、砂堤に閉塞されて埋積した三角州状の泥質堆積物の低地、山地をはなれる部分に形成された砂礫質の扇状地的の堆積地、河谷にそう山間の埋積低地などからなり局地的に多様性を示している。集落は山脚の崖錐状地形の高まりにも立地する。運搬土砂量は多く、押し出しや土石流的堆積物による埋積谷もあり、傾斜地は樹園地としての土地利用が拡大している。宇佐美湾は直径 1.5 km ほどの半円形の湾であり、海岸に沿っては砂浜、礫浜が発達し、平滑な海岸となっている。そして海岸は防潮堤による道路の建設など人工化がすすみ、沖積地も市街地化がすすんで水田や畑地も減少している。1703年、1923年の地震では津波による流失、倒壊が多く、予想される地震のための対策も必要であり、国道135号線の内側には国道の高さより低い海拔4.3 m以下の土地が帯状にのび、浸水の危険性をもっている。宅地化にともなって河川の流路も改修により人工化されており、河床はやや下刻した位置に

ある。

II d 丹那断層低地群

多賀火山の西斜面には、函南町田代、丹那、南方の大仁町浮橋まで、いわゆる丹那断層にそう盆地群が南北方向につらなり、低地群を形成する。いずれも盆地底には沖積層が堆積して水田地帯となっており低地群と区分した。丹那盆地の地形については、その南縁を通過する熱函道路にそって盆地とその周辺の地形を俯瞰することができる。盆地群の生成については、火口説、浸食説、断層陥没説などさまざまであったが、火山斜面の一部が、下方撓曲によって形成された盆地で造盆運動の結果であろう。そして盆地は断層でかこまれた地形を呈するが、丹那断層の垂直変位量は水平変位量にくらべて大きくなく、盆地形成の影響はそれほど大きくないとの指摘もある。盆地をとりまく東側の急斜面の地形と西側の波浪状緩斜面との地形は対照的であり、軽井沢の平坦地は、丹那と田代盆地との間の階段状地形のひとつと考えられている。

丹那盆地の地下構造は丹那トンネル工事を機会に調査がすすめられ、多賀火山噴出物上に厚さ約 50 m に及ぶ凝灰質の砂やシルトからなる湖成堆積物が堆積し、深度約 20 m までの湖底坦積物は、約 20000 年前以降の生成物であるといわれる。盆地中央の川口の森とよばれる突出部は丹那断層の通過する地点に位置しており、その丘陵は角礫とスコリアの層からなり、断層によって地下からおしあげられた高まりといわれる。また、東側の斜面からすべりおちた扇状地性の堆積物のブロックであり、地下の断層にそうプレッシャーリッジとよばれる高まりの上ののっている部分とも考えられている。この地下の活断層の歴史と動きを調査するために、1980 年と 1982 年にトレンチによる活断層の発掘調査がおこなわれた。その結果、地下の沼沢性湿地から木片や木の根が発見され森林におおわれた時期のあったことが知られる。841 年（承和 8）の大地震が史料的に丹那断層が震源とされていたがそのあとが確認されたことやほぼ 1000 年に 1 回の割合で断層が活動したことなど地層の変形から古地震の結果も判明した。

丹那断層は西側の地塊が東にむかってずりあがった逆断層で、断層面の傾斜は西へ 75～80°である。また東側が相対的に北にずれる左横ずれの動きもみられる。そして全長 30 km に達し、左横ずれの総変位量は、火山斜面の地形異常から 1 km に及ぶとされている。たとえば軽井沢の西の東むきの断層崖にみられる風隙にその事例がみられ、それは水系が切断された跡であり、その延長は 900～1,100 m

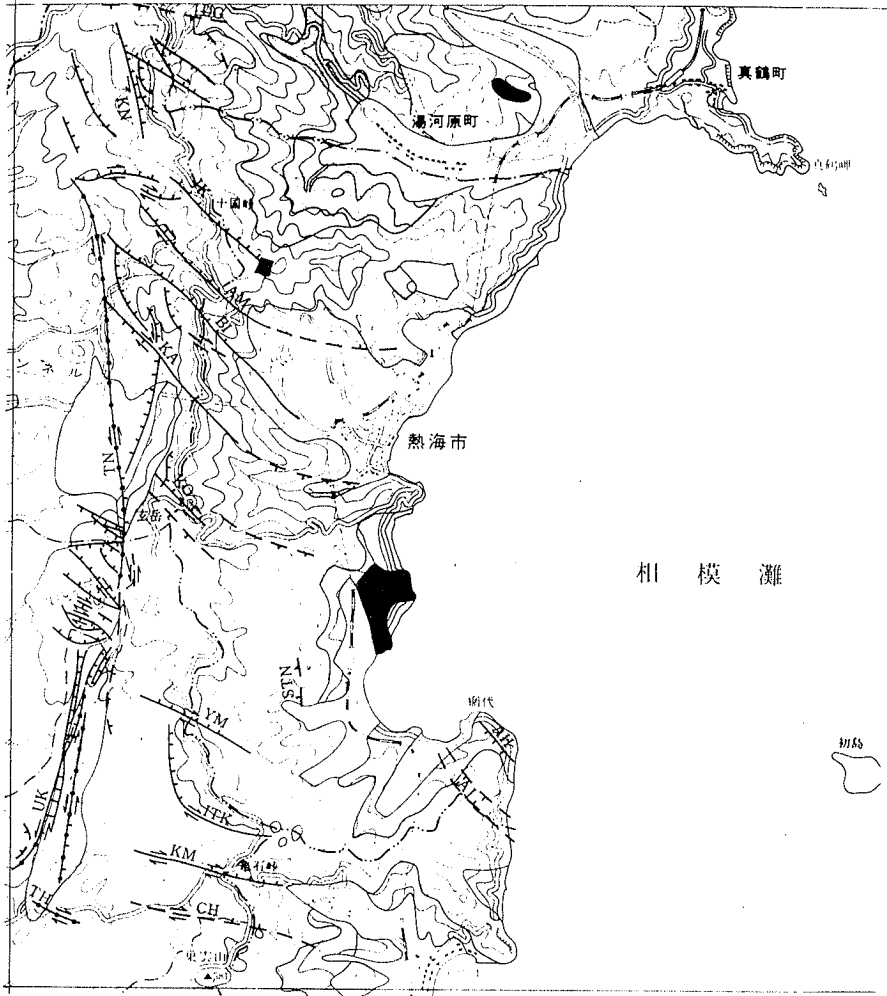
北方にずれて変位している。

1930年の北伊豆地震(M=7.0)の際には地震断層があらわれ、水平移動量3m、垂直移動量2m程であった。また丹那盆地南方の池の山峠以北ではみかけ上の変位は西おち、以南では東おちで、ちょうつがいの変位を示した。そして丹那盆地南部の乙越には丹那断層が通過し、水路や石列の変位が260cmほど左横ずれをしたが、その地点は地震の動きのあとを示す天然記念物として保存されている。

田代盆地では1930年の地震の時には盆地の中央が陥没し、同心円状の地割れが生じ、水田面は70cmほど沈下したという。また盆地の西の端は南北方向に東むきの断層崖があるが1930年にはその線にそい、左横ずれで150cmほど変位し、火雷神社にその跡が残っている。そして盆地の周辺は半円形の断層崖でかこまれ、これまでの断層運動にともなう張力の集積として、盆地地形が形成されたとも考えられる。この田代盆地から丹那をへて池の山峠に走る延長7kmの間が断層線がもっとも明瞭に追跡されるので、その区間を狭義の丹那断層とよんでいる。

丹那盆地の地形も前述のように周辺は断層でかこまれ、半円形の断層崖が発達しているが、盆地内を流れる柿沢川は盆地の西側を、火口瀬のような地形で流出している。田代盆地からは冷川、浮橋からは深沢川が同様に流出している。

浮橋は盆地というより地溝状の地形を示し、西側に比高50～60mの断層崖がある。深沢川にそってさかのぼる谷は池の山峠にのびるが、これは浮橋中央断層ともよばれ、南方は田野原に達する。このように丹那盆地を中心とする山間の低地群は、断層運動との関係で地形が形成されてきた経緯をもっている。熱海図幅内にみられる断層系と、それぞれの特色を図と一覧表によって示した。



(地質調査所(1978)伊豆半島活断層図による)

熱海図幅にふくまれる活断層

略号	活断層名	分類
AH	朝日山 Asahiyama	I a
AM	熱海峠 Atami-toge	I b, II b
BI	梅園 Baien (*)	I b
ITK	板橋北 Itabashi-kita (*)	I b
JK	十国峠 Jyukkoku-toge	I b
KA	軽井沢 Karuizawa (*)	I b, II b
KM	亀石峠 Kameishi-toge	I b
KN	函南 Kannami (*)	I b
KO	水ヶ池・玄岳 Korigaike-Kurodake (*)	I b, II b
TH	田野原 Tanohara	I c
TN	丹那 Tanna (*)	I e, I b
UK	浮橋 Ukihashi (*)	I c, I b
YM	山伏峠 Yamabushi-toge (*)	I b, III b
AJ	網代 Ajiro (*)	II b
AK	熱川 Atakawa (*)	II b
CH	長者原 Chojahara	II b
STN	下多賀西 Shimotaga-nishi	II b
UG	湯河原峠 Ugahara-toge (*)	II b
IW	岩戸山 Iwatoyama (*)	III b
MN	真鶴 Manazuru	III b
NY	新山 Niiyama	III b
SK	城山 Shiroyama	III b

(地質調査所(1978)伊豆半島活断層図説明書による)

- | | |
|-----------|----------------------------------|
| I 确实活断層 | { a 地質学的確認
b 地形学的確認
c 地震断層 |
| II 準确实活断層 | |
| III 推定活断層 | |

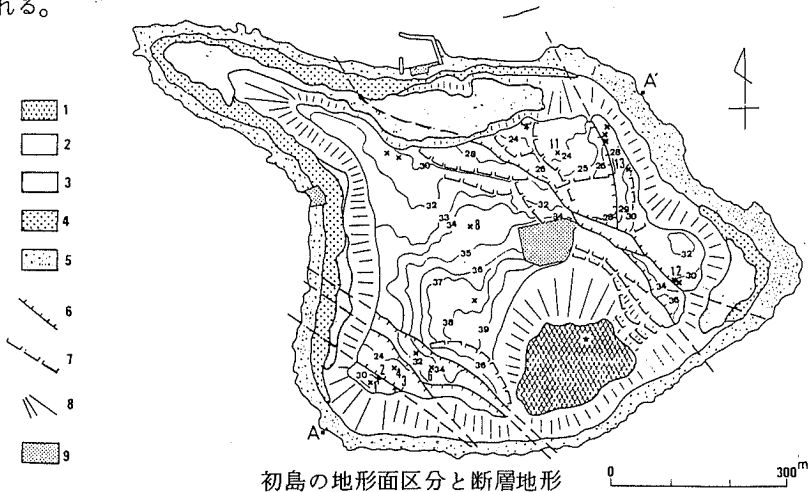
(※)印は断層群

III 島

IIIa 初 島

初島は熱海海岸の南東沖合約 10 km に位置する台地状の島で面積約 0.47 km² をもち、東西約 1.1 km、南北約 0.7 km である。海底地形図によると、島の周辺は 120 m 以浅の平坦な海底地形が認められ、100 m の等深線で網代付近とつづいているといわれる。初島の基盤をなすのは火山岩類で、網代玄武岩、初島玄武岩とよばれる第三紀鮮新世の火山活動の噴出物とされたが、第四紀のものとも考えられている。表面は段丘堆積物と火山灰層におおわれ、島の周辺は急崖をなして海に面し、海食崖を形成している。1923 年の関東地震の際には地割れや落差を生じたこと、活断層と考えられる断層のあることから、構造的にも特色をもつ島といえる。

杉原（1980）によると初島の海成段丘は地形面と構成物質から 5 段に区分されている。その分布と断層については下に図をあげておく。I 面は 50 m 前後、II 面は 25～40 m、III 面は 9～15 m、IV 面は 5～8 m の高度をもち、V 面は 5 m 以下の礫浜地帯であり、1923 年の関東地震では 2 m の隆起がみられた。II 面が広く分布し 1～2 m の砂礫層が表層をおおっており浅海性や沿岸域の堆積物と考えられる。



初島の地形面区分と断層地形

凡例：1；初島I面，2；初島II面，3；初島III面，4；初島IV面，5；初島V面，6；主要断層崖（破線は推定延長線），7；断層運動と関係あると考えられる小崖地形，8；段丘崖（急傾斜地），9；人工改变地。初島II面の等高線の単位はm。星印はトレンチ掘削地点。×印はボーリング地点。1～4, 6, 8, 11～13は柱状図(第3図)の地点。A-A'は地形断面図(第5図)の位置。

(杉原重夫(1980)による)

初島の台地面をおおう火山灰層の中には厚さ 10～30 cm の東京軽石層、始良火山灰層、鉢ヶ窪スコリア層などが示標火山灰層となっており、初島Ⅱ面の地形面は、南関東の三崎面と対比され、時代的に約 60000 年前と推定される。初島にみられる断層の変位地形についてみると、北東側が相対的に低下する傾向がつよく、初島北部の断層崖にそれがあらわれており、階段状の断層地形となっており断層による変移量は最大 18 m にもおよぶ。また南部にも断層がはしり、南西おちの傾向をもつと考えられ最大変位量は 15 m ほどであるという。断層にはさまれた地溝状の窪地など、小さい地形であるが特色をもっている。これらの断層は伊豆半島にみられる断層系と対比して、伊豆東岸の北西—南東方向の断層系の延長のあらわれとも考えられている。面積的に限られた範囲での生活は厳しく、耕地面積や水の制約から人口や世帯数は長い間制限されてきた。最近では水道も敷設され、民宿が増加しレジャー施設もでき初島の環境と生活は変貌した。

4. 起伏量図

起伏量図は国土地理院発行、縮尺 5 万分の 1 地形図の各辺を 20 等分してえられる各方眼内の、最高点と最低点との標高差を下記の階級区分によって図示したものである。各階級の分布とひろがりをもとにして、山地や火山地、山麓などの地形分類および地形区分図の作成の基準とした。

- 0 : 50 m 未満
- 1 : 50 ~ 100 m
- 2 : 100 ~ 150 m
- 3 : 150 ~ 200 m
- 4 : 200 ~ 300 m
- 5 : 300 ~ 400 m
- 6 : 400 ~ 500 m
- 7 : 500 m ~

起 伏 量 図

小 田 原	4								
	3	2							
	3	3	4						
熱 海	4	4	4						
	4	4	3						
	4	4	4	5	5	4	5		
	4	5	7	5	5	4	4	3	3
	3	3	5	4	5	5	5	5	4
	3	2	4	4	3	6	5	5	4
	2	4	5	5	5	5	5	4	1
	4	3	5	5	3	4	5	2	
	2	1	6	5	5	4	3		
	2	4	5	5	5	5	3		
	3	3	5	5	5	4	4		
	4	3	4	5	5	4	4		
	3	4	4	5	5	4	4		
	3	4	4	4	6	4	0		
	3	3	4	5	5	4	0	2	3
	3	1	3	4	4	4	4	4	3
	3	1	2	2	4	5	4	4	2
	1	1	1	1	5	5	4	4	2
1	2	1	2	5	4	4	4	2	
2	2	3	4	5	4	2	3	3	

5. 道路と河川

国 道……1号 135号

主要地方道……熱海函南線 沼津伊東線 熱海箱根峠線

有料道路……熱海ビーチライン 大熱海観光道路（熱海新道）

伊豆スカイライン 日通富士見ウェイ

河 川（静岡県河川便覧による）

水系名	第1次 支 川	第2次 支 川	河川延長 (m)	流域面積 (km ²)		
				支川流域	自己流域	計
狩野川	来光川		11,200	55.13	23.95	79.08
		柿沢川	10,600	6.75	34.43	41.18
		函南冷川	6,000		13.95	13.95
		韭山古川	3,000		12.46	12.46
		深沢川	10,500		22.68	22.68
伊東仲川			2,140		2.49	2.49
鳥 川			2,320		7.84	7.84
水神川			1,400		2.97	2.97
鍛治川			1,100		1.43	1.43
熱海仲川			910		2.75	2.75
熱海宮川			1,750		5.49	5.49
上多賀大川			1,350		8.11	8.11
熱海和田川			3,550		7.15	7.15
初 川			3,250		6.97	6.97
糸 川			2,900		3.16	3.16
逢初川			1,300		1.21	1.21
千歳川			4,950			

（狩野川水系は一級河川 他の水系は二級河川）

（北川 光雄）

< 参考・引用文献 >

熱海市（1967） 熱海市史（上巻）

金子史郎（1972） 地形図説 2 古今書院

金子史郎（1977） 丹那断層ノート 地理 22巻7号

久野 久（1965） 7万5千分の1地質図“熱海”及び説明書 地質調査所

静岡県（1974） 静岡県地震対策基礎調査報告書 一伊豆半島一

静岡県（1980） 静岡県地震対策地質条件図Ⅰ（伊豆半島）

杉原重夫（1980） 静岡県熱海沖初島の海成段丘と断層地形

明治大学人文科学研究所紀要 19

地質調査所（1978） 伊豆半島活断層図

萩原尊礼（編者）（1982） 古地震—歴史資料と活断層からさぐる—

東京大学出版会

星野通平ほか（編）（1972） 伊豆半島 東海大学出版会

山崎晴雄（1983） 丹那断層と丹那盆地 1983年 日本第四紀学会巡検案内書

Ⅱ 表 層 地 質

1. 総 説

本図幅は伊豆半島のつけ根の東半部にあたる地域である。他の伊豆半島の各地と同様に、基盤は新第三紀初期中新世と考えられる湯ヶ島層群と中期中新世一鮮新世の白浜層群から成るが、本図幅内は大部分が湯ヶ島層群と思われる。しかし、何れにせよ、地表では限られて露出する。あとの大部分の地域は更新世火山噴出物でおおわれ、南から、宇佐美火山、多賀火山、湯ヶ原火山、箱根火山と云った火山体が上記の新第三系の上のっている。これらの火山体は玄武岩、安山岩溶岩、凝灰角礫岩、凝灰岩などから成るが、ところによって表層部にローム層をのせている。初島は鮮新世火山岩が波食されその上にローム層をのせている。

本図幅の特徴は、西縁に南北に左横ずれを主とする地震断層かつ活断層である丹那断層が走っていることである。また、それに伴って、NW—SE性の共役断層が南から北へ幾条も並行して走っている。これらは大断層ではないが、丹那盆地をはじめとする主断層に沿った盆地群の形成に関与し、また、断層に沿った区域では大雨による山崩れや斜面崩壊をしばしば引き起こしている。

2. 固結堆積物・火山岩類

湯ヶ島層群：この地域の基盤をつくる地層は主として岩相の類似から湯ヶ島層群と考えられている。谷底または海岸沿いに狭く露出し、数ヶ所に分布する。

暗褐色玄武岩—安山岩溶岩、火山角礫岩、凝灰角礫岩等で、他地域と同じように熱水変質作用を受けて著しく変質している。また、このため深部まで風化がすすんでいる。

白浜層群：“熱海凝灰岩”といわれる石英安山岩質凝灰岩と頁岩の互層で熱海西縁に露出するもの、及び、“下丹那頁岩”と呼ばれる下丹那西方の軽石及び火山礫を含む頁岩層はおそらく白浜層群に属するものであろう。地質時代は不詳であるが、下丹那頁岩は更新世の可能性もある。何れにせよ、両者共分布はきわめて限られる。

3. 火 山 岩 類

本図幅の広域を占め、宇佐美火山、多賀火山、湯ヶ原火山、箱根火山の安山岩及び玄武岩溶岩と凝灰角礫岩、凝灰岩などから成り、何れも新鮮な岩石から成る。本図幅北縁に安山岩から成る箱根火山の幕山火山円頂丘の一部が見られる。

このほか、上記更新世火山におおわれたり、湯ヶ島層群より変質が弱く、新期と思われる火山岩類を鮮新世火山岩類として一括してある。主に散在して分布する玄武岩、安山岩溶岩及び凝灰角礫岩であるが、ところにより変質して褐色化し、また、温泉作用を著しく受けて粘土化した部分がある。初島の玄武岩もこれに含めてある。

4. 火山性未固結堆積物

火山灰層、ローム層などは厚さ数 m 以下であるが、北に向って厚くなる。火山性岩層は火山体の浸食谷の一部に分布する。このほか、須雲山火山はドーム状の火山体で主体は堅硬な玄武岩から成るがスコリア質玄武岩火山礫の部分もあり、未固結としてここに含めた。

5. 未固結堆積物（沖積平野をつくる地層）

沖積平野と云っても、本図幅内では宇佐美、上多賀、下多賀、熱海など海岸沿いの小河川の河口につくられた狭いもののみである。したがって、大部分は火山性砂礫層から成るが、海浜近くでは一部に軟弱な砂泥層を混えることがある。

このほか、丹那盆地、田代盆地、浮橋盆地などで、中心部では数 $10m$ の厚さの砂質粘土と礫などから成る湖成堆積物が分布する。

（土 隆一）

文 献

久野 久（1952）地質図幅“熱海”に 75,000 及び同説明書。
地質調査所、P 1—141。

星野一男ほか（1978）：1：50,000 伊豆半島活断層図。地質調査所

Ⅲ 土 壤 図

1. 岩 石 地

土壤層がなく、基盤が露出している。本図幅では東海岸の海食崖地帯および採石跡地に分布する。

2. 人工未熟土壤

人工によって自然の土壤断面形態が乱され著しく変形を受けたため、土層の分化発達が進んでいない未熟な土壤である。これに属する土壤統は丹那1統で、ローム層に覆われる丘陵地帯の大規模農地造成により、下層土（ローム層）が地表に露出するものである。表土は暗褐色、下層は暗褐～褐色で埴質である。主に畑地、牧草地として利用され函南町丹那地区に多く分布する。

3. 黒ボク土壤

土色の明度、彩度ともに2またはそれ以下の黒～黒褐色を呈する腐植質表土層（黒ボクのA層）の厚さが25cm以上50cm未満の土壤で、一般に褐～明褐色の下層に漸移する。これに属する土壤統は浮橋1統で、浮橋盆地周辺および熱海市七尾地区の山麓緩斜面に主として分布する他、熱海市初島の火山灰台地上にも見られる。黒褐色の表層を持ち、下層は褐色で埴質な風化火山灰層である。主に普通畑として利用されている。

林野土壤では、元山中統、田中山1統、城1統、日金山統である。このうち、元山中統、田中山1統は沼津図幅、城1統は伊東・稲取図幅の土壤名を踏しゅうした。元山中統は黒色のA層が7.5 Y R 2 / 1 < 2 の色相を有し、沼津図幅のものよりやや退色が弱く黒味が強い。山中新田周辺に分布し、主としてヒノキ人工林として利用されている。田中山1統は沼津図幅同様軽埴土質のB、C層を有するが、やや暗褐色の色相が強い。図幅西南部の修善寺町地内に分布し、主としてヒノキ人工林、天然広葉樹林として利用されている。城1統は黒～黒褐色のA層と埴壤土質のB層を有する土壤で、主稜の緩凸部に分布し、主としてヒノキ人工林もしくは原野を形成している。日金山統は30～40cm深の黒色腐植層と7.5～10 Y Rの色相を呈するB、C層からなる。日金山周辺に分布し、主として原野を形成している。

4. 淡色黒ボク土壤

黒～黒褐色を呈する腐植質表土層（黒ボクのA層）の厚さが25cm未満か、ま

たは腐植含量が少なく表土層の黒味の弱い黒ボク土壌である。これに属する土壌統のうち、網代統は、山腹斜面でその傾斜が 15 度以下のところに主として分布する。表層は暗褐色で、下層は褐色のよく風化した火山灰よりなる。多賀 1 統は、山麓斜面末端のやや傾斜が急（20 度程度）のところに分布し、暗褐の表層は薄く、下層には角礫を含む。

林野土壌では田中山 2 統で沼津図幅の土壌名を踏しゅう、微細質壤土を呈する黒褐色の A 層とその下層に存在する B、C 層が暗褐～黄褐色であるのが特徴である。大仁町浮橋周辺に比較的広く分布し、ヒノキ人工林として利用されている。

5. 乾性褐色森林土壌

湿潤温帯の森林植生下に発達する A、B、C 層位置配列を有する土壌である。この土壌は森林植物の落葉、落枝とそれらの不完全分解物からなる粗腐植が地表面にやや厚く堆積し、その下に黒褐色の A 層と褐色もしくは淡褐色の B 層があり、両者の堆積はやや判然としている。A 層下部又は B 層上部には乾燥破碎によって発達した独特な土壌がみられる。これに属する土壌統は松原 1 統、宇佐美 1 統、多賀 2 統、泉 1 統である。松原 1 統は伊東・稲取図幅の土壌名を踏しゅう。松原 1 統は暗褐色の A 層下部には砂質埴土質でやや暗色味の強い褐色の B、C 層がみられる。宇佐美地内分布するが、本図幅内では少ない。主として天然広葉樹林として利用されている。宇佐美 1 統は砂質埴土質で赤褐～褐色の C 層を有する。主として多賀火山噴出物（玄武岩質）分布域の尾根すじにみられ、天然広葉樹として利用されている。多賀 2 統は 10 YR の色相を有する B、C 層を有する。熱海市多賀周辺の尾根すじに分布し、主としてヒノキ人工林、天然広葉樹林として利用されている。泉 1 統は埴壤土質の土層と 7.5 YR の色相をもつ。熱海市伊豆山、泉地内（湯ヶ原火山噴出物）の尾根すじに分布し、ヒノキ人工林、天然広葉樹林として利用されている。

6. 褐色森林土壌

乾性褐色森林土壌と同様の森林帯にあるが、常に地中水分に富む斜面下部に多く現れ、黒褐色ないし暗褐色を呈するボウ軟な厚い A 層が発達し、その下部にある褐色の B 層へ漸変している。これに属する土壌統は松原 2 統、城 2 統、宇佐美 2 統、多賀 3 統、泉 2 統、桑原統である。このうち、松原 2 統、城 2 統は伊東・稲取図幅の土壌名を踏しゅう。松原 2 統は暗褐色の A および B 層が厚く、層位の分化がみられ、その下層には暗赤褐色を呈する C 層が存在する土壌である。松原 1

統に隣接し、その下斜面に分布し、ヒノキ人工林として利用されている。宇佐美 2 統は中程度に発達した A 層を有する。B₁、B₂ 層は暗褐～褐色を呈するが、下層に進むにつれやや暗赤褐色の色相を増す。宇佐美 1 統に隣接し、その下斜面に分布し、主として天然広葉樹林、ヒノキ人工林を形成する。多賀 3 統は発達した暗褐色の A 層と褐色で 7.5 > 10 YR の色相をもつ B・C 層を有する。多賀 2 統に隣接し、その下斜面に分布、主としてヒノキ人工林として利用されている。泉 2 統は泉 1 統同様、埴壤土質で、7.5 YR の色相の強い B 層が発達した土壌である。泉 1 統の下斜面に分布し、主としてスギ、ヒノキ人工林として利用されている。城 2 統は 7.5 YR の色相をもつ A・B 層と 10 YR の色相を呈する C 層を有する土壌で、田中山 2 統の分布域の斜面下部にみられ、主としてヒノキ人工林もしくは天然広葉樹林として利用されている。桑原統は軽埴土質で極暗褐色の A 層、およびやや埴質で褐色の B 層の下層には、元山中統の下層に類似する暗赤褐色の C 層を有する土壌である。三島市桑原地内の来光川源流部において、主として天然広葉樹林を形成し古くから水源かん養林として利用されている。

7. 黄色土壌

湿潤気候の常緑広葉樹林下に生成された土壌で、薄い暗色の A 層の下の B 層は 5 YR よりも黄色の色相を持つものである。一般に A 層の腐植含量が低く、B 層は粘土化が進み埴質である。これに属する土壌統は宇佐美 3 統で、伊東市宇佐美周辺の、山腹急斜面（傾斜 30 度以上）に小面積分布する。表層より明るい黄褐色を呈し、安山岩の風化礫に富む。下層には赤色の不朽礫も混じる。急傾斜地のため火山灰が堆積しにくく、基盤の安山岩層が風化されて出来た黄色土と考えられる。主に階段状の果樹園として利用されている。

8. 褐色低地土壌

A 層は比較的発達せず、ほぼ全層が暗褐～褐～黄褐色を呈し、土性が中粒～細粒質の低地の土壌である。これに属する土壌統のうち深沢統は、丹那断層帯にそって形成された深沢川の谷底低地に分布し、深沢川によって再堆積した火山灰を母材とする。表層から下層まで暗褐色を呈し埴質であるが、排水は良好で水田として利用された事もないため、斑紋は認められない。主に普通畑として利用されている。宇佐美 4 統は、相模灘に流入する小河川の谷底低地に小面積ずつ分布する。表層は黒褐色を呈し、下層は暗褐色、埴質で斑紋を含む。以前は水田として利用されていたが、現在は転換畑および果樹園として利用されている。比較的排

水は良好であり、下層の斑紋は水田として利用された時に形成されたものと考えられる。丹那2統は、中粒質で斑鉄を含みB層の下位（地表より50cm以深）にグライ層が出現する。丹那盆地の中心部を占め水田として利用されている。滝沢統は、低地の山ぞい^いを占め、山地からの押し出し堆積物を母材とする。中粒質で、水田または転換畑として利用されている。

9. 細粒灰色低地土壌

土性が細粒質で灰色の土色を持ち、斑紋の存在が見られ地表下50cm以内にはグライ層の出現が見られぬ低地の土壌である。これに属する土壌統のうち浮橋2統は、丹那断層帯の活動に関連して形成された大仁町浮橋、田原野、長者原の各盆地に分布する。黄灰色で埴質な土層よりなり斑紋が発達している。最下層は黒褐色を呈し、泥炭を含む事もある。主に水田として利用されている。丹那3統は、細粒質で、斑鉄を含んだ灰褐色B層を下層土とする。沖積低地であって、水田（一部転換畑）として利用されている。

10. 細粒グライ土壌

土性が細粒質で、地表下50cm以内にグライ層が出現する土壌である。これに属する土壌統のうち田代統は、有機物に富む黒泥質のグライ層が浅所（30cm以内）から出る強グライ土壌である。函南町田代の盆地にあり、水田として利用されている。新山統は、地表近くが弱グライ化を受けた土壌である。約50cmまでグライ斑、灰色斑を含む。その下位は黄褐～褐色の土層が来る。山地中腹緩斜面にあり、おそらく浸出水の影響を受けているためであろう。畑地として利用されている。

（ 縣 富美夫 川口菊雄 高橋和彦 加藤芳朗 浜田竜之介 ）

Ⅳ 標高及び傾斜区分図

地形の特色は標高、傾斜度、斜面形などの表現によっても把握することができる。本図幅における海拔高度の高い地域は北西部の箱根外輪山からほぼ南北方向にのび、鞍掛山（1,004 m）、日金山（765 m）、玄岳（798 m）、巢雲山（580 m）と伊豆半島基部を東西にわたる山稜にそって山頂が位置する。その間に箱根峠、熱海峠、山伏峠、亀石峠などの鞍部があり、東西の交流のルートとなっている。図の等高線は100 mごとの標高を示し、切峰面図的に谷をうめて表現されている。稜線を境にして東方の相模灘に面しては急斜面、西方は緩斜面をもって等高線が分布しており、傾斜区分もそれに対応している。

S₆～S₇の急傾斜はほとんど山稜東側にみられ、河川源流部の谷頭浸食、下刻や開析にともなう谷壁斜面、海岸ぞいの海食崖などにみられる。日金山から岩戸山にかけて面積的に広がるが、他の地域では連続的というよりも断片的に分布する。この急傾斜地と周辺の緩傾斜地との接する部分は傾斜の変換部にあたり、崩壊や斜面災害の発生しやすい地形にあたり、それに対する注意が必要となる。海食崖は地形分類にも表示されているが、山地のせまる崖にそって通過する区間の道路は落石崩壊などに対し防災的に措置の必要な区間である。

S₃～S₅については中間的な傾斜で地形的な漸移部、西側斜面における谷壁にみられるし面積的には広がっている。山地の一般的傾斜度で安定した角度にあたる。しかし同一段階の区分の中においても図に表現されない局地的な変化は大きく、土地利用にあたっては現地での検討が必要となる。S₃（8～15°）になると人工改変による平坦地化や造成もむられるようになり、本図幅では丘陵の地形と対応できる。

S₁～S₂は8°以下の緩傾斜また平坦地であり、沖積地、山間低地と盆地、山頂山腹平坦面の地形に対応する。水田から傾斜地には畑地利用へと移るが、人工改変地の多い本図幅ではゴルフ場がS₂～S₃とほぼ一致する。別荘地もいくつかあるが、地形改変に至らない斜面利用という方法であるが、地震に対する振動や地すべりに対する対策が重要であろう。西斜面における緩傾斜地は火山の原面の残りや堆積面を示すこともある。

傾斜区分をもとにした地形の規則性を発見することは困難であるが、パターンの概観から本図幅内をとおる断層系との関係はみられる。それは東斜面における北西

一南東方向の断層系が切峰面的標高区分の方向性、東西方向にのびる尾根のはり出し、同一の傾斜区分の並び方などにやや表現されている。中央から西方にかけての盆地列、 S_2 や S_6 の分布の方向性、などは構造的影響の結果であろう。

傾斜区分図の利用にあたっては、傾斜区分の境界に注目すること、消去されているマイクロな地形を配慮すること、地すべり性崩壊など災害の歴史と重ねあわせることなどに留意したい。

(北川光雄)

V 水系谷密度図

水系と谷密度は図幅における地形形成の歴史をある程度物語っている。本図幅では火山体とその解体の過程、地殻運動、岩石や地層の耐食性の地域差などがもとなつて河川についての特性がまぎまっている。

東側の相模灘に面する地域には熱海湾、多賀湾、宇佐美湾などがそれぞれ半円形の湾入部を形成しており湾奥にむかう上流部からの求心的水系、あるいは放射状的水系が一次的にまぎっている。熱海湾にむかう初川、糸川、和田川、多賀湾にむかう大川、宮川、仲川、鍛冶川、水神川、宇佐美湾にむかう島川、宮川、仲川などがそれにあたる。上流部は火山体のカルデラ状の谷壁を浸食するように樹枝状の水系を発達させ、流域を拡大し谷密度も大きくなっている。これらの河川は流域面積は小さいが、比高はそれにくらべて大きいことや搬出物質も多量であることが特色であろう。そして源流部に崩壊をとまなうこともおおい。また本図幅の東部には、構造的に北西-南東方向の断層系がみられ、その活断層に支配される流路も考えられ、水系の方向性にあらわれている。箱根火山地における流路の屈曲はその表現かもしれない。

伊豆スカイラインの通る稜線を分水界にして西側の流路は一級河川狩野川の支流である来光川、函南冷川、柿沢川、深沢川などの上流域にあたる。東側にくらべて谷密度が小さく、水系も不統一であるのは、丹那断層による変位と、丘陵性の地域を流れる河川特性からくるのであろう。南北方向に長い流路をとり、浮橋から西流する深沢川はいわゆる丹那断層にそう断層に支配された谷の特色をもっている。柿沢川、函南冷川、来光川などの流路はいずれも屈曲した水系異常を示すが、これは断層の横ずれによる結果ともいわれるが、詳細は今後の調査にまちたい。丘陵性地形における河川は、緩斜面と広い尾根、浅い谷と起伏は小さく谷密度は量的にすくないが、緩斜面を開析する水系は直線的な流路と下刻した峡谷を示す場合もあり、地形の初期的段階が風景としてはみられる。田代、丹那、浮橋など盆地状の地形から流出する河川は、火山の火口壁を破って流出する火口瀬のような流出口をもち、地形的には峡谷状である。

本図幅には人工改変地がおおい。ゴルフ場は広い面積が伐採や芝生のはりつけ、平坦地化がおこなわれ、人工流路の敷設もみられ、水循環に影響を与えている。したがって人工改変地や別荘地において原形の水系をおうのに困難な場合もあった。

熱海図幅にふくまれる火山体はその生成年代、構成岩石、表層地質などさまざまであり、水系や谷密度の差異をもたらしている。谷密度の値をもとに規則性をみることは困難であるが、大きな値の分布は崩壊が激しく小支谷の発達しやすい岩相と一致するし、丘陵性のあついで堆積物におおわれる地域の谷密度は小さい値であり、浸食の初期の段階を表現しているといえる。

(北川光雄)

谷 密 度 図

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K
A	32										
B	39	42									
C	27	23									
D	30	32									
E	24	31									
F	21	32	36	33	30	32					
G	26	20	25	28	38	44	24	25	22		
H	26	19	22	23	33	40	34	32	7		
I	26	20	27	25	28	32	29	12			
J	30	21	25	28	22	29	15	3			
K	27	10	18	35	29	18	6				
L	25	14	22	34	38	20	5				
M	21	28	20	35	27	24	7				
N	26	27	30	40	30	30	9				
O	24	27	32	31	30	25	4				
P	31	29	36	36	34	17					
Q	20	28	27	37	37	19					
R	28	38	27	36	40	30	28	20	5		
S	34	31	26	40	41	38	35	38	6		
T	28	29	32	28	37	35	34	41	3		
U	29	27	34	38	30	34	32	30	3		
V	30	29	31	36	28	24	15	5			

Ⅵ 土地利用現況図解説

1. 農 地

当図幅の土地利用現況は、箱根峠～玄武～山伏峠～亀石峠と続く分水嶺の東西で大きく異なる。これは分水嶺の東西で気候および地形が大きく異なる事に起因する。すなわち分水嶺の東側は相模灘に面しているため、海洋性気候で気温の年較差が大きい。また、箱根火山、湯ヶ原火山、多賀火山、宇佐美火山によって形成されている地形は、分水嶺の東側が爆裂火口を中心に激しく浸食されており急傾斜地が多い。これに対し西側は、丹那断層帯により切断されているものの、火山山麓の緩傾斜面がよく保存されている。丹那断層帯には田代、丹那、浮橋、長者原の盆地列も生じ、平坦地も比較的多い。また、分水嶺の東側は、湯ヶ原、熱海、多賀、宇佐美等の温泉が続き、この事は人文的条件の側からも土地利用に影響を与えている。

まず分水嶺の東側では、中腹の急斜面から山麓緩斜面にかけての傾斜地は、温暖な気候を利用して階段状の果樹園になっており、みかんが栽培されている。熱海市泉、多賀、伊東市宇佐美等に面積が広い。また、海岸平野や谷底低地等の平坦な場所は、熱海、多賀、宇佐美等に小面積しかないが、人家が密集しており民宿、旅館、ホテル等の観光施設が多い。特に、熱海は中腹より海岸線まで観光施設が並び、一大観光都市と化しており、農用地は極めて少ない。多賀、宇佐美等の小河川にそった谷底低地は、元は水田として利用されていたが、現在は転換畑もしくは果樹園として利用されている。

相模灘に浮かぶ初島は、火山灰台地であるが、台地の平坦面は普通畑として利用され、ダイコン等が栽培されている。

次に分水嶺の西側では、火山山麓の緩傾斜面は、大規模農地造成が行なわれており、普通畑としてニンジン、パレイショ、ダイコン、ハクサイ等が栽培されている他、牧草地としても利用されている。また、ゴルフ場やレジャー施設、別荘地として開発されている面積も広い。丹那断層帯の中の盆地は水田として利用されており、多くは湿田であるが、基盤整備等によって排水が良好になり乾田化している所もある。

(川口菊雄、高橋和彦)

2. 林 地

本図幅に含まれる地域は、伊豆半島のつけ根部分に位置し、富士箱根伊豆国立公園に含まれており、熱海温泉を中心とした観光地として古くから観光の拠点となっている。

東側は相模灘に面し、西側は山地が広がり、図幅の中心部に伊豆スカイラインが走っている。

森林面積はおよそ9,400 haで、内国有林は1,600 ha、民有林が7,800 haである。全区域面積に占める森林面積の比率は、熱海市 63%、三島市 43%、函南町 55%、韮山町 53%、大仁町 63%、伊東市 57%であり 県平均の67%をいずれも下まわっている。

伊豆地域はかつて木炭や薪の生産が盛んであったが、近年のエネルギー革命によりその利用は低下している。戦後の造林推進により箱根山を中心に人工林化が進んでいるが、県平均の人工林率59.5%を上まわるのは、三島市(68.8%)のみであり、他は最低の熱海市(41.9%)のように人工林は少なくまた30年生以下の人工林が大部分を占めている。しかし、シイ、コナラ、クヌギ等の広葉樹が現在も多く、しいたけ原木林としてその活用が図られている。また、この地域には江戸時代よりつづく田方平野への水源林として函南町禁伐林等があり、地域住民の生活と深いかかわりを持っている。さらに、伊豆スカイライン、熱函道路、大熱海観光道路等の観光に利用される道路が多数走っており、自然林を生かした風光明媚な箇所が多く、観光資源として大いに生かされている。

(阿部 卓、本間康弘)

森 林 概 況

市町村名	林 野 総面積	民 有 林						国有林
		総 数	人工林	天然林	竹 林	原 野 その他	人 工 林 率	
熱 海 市	3,926 ^{ha}	2,851 ^{ha}	1,194 ^{ha}	1,410 ^{ha}	52 ^{ha}	195 ^{ha}	42 [%]	1,075 ^{ha}
伊 東 市	7,026	6,996	3,538	3,322	48	88	51	30
函 南 町	3,634	3,634	1,961	1,161	192	320	54	—
韭 山 町	1,844	1,660	983	563	14	100	59	184
修善寺町	4,692	4,245	1,589	2,576	36	44	37	447
大 仁 町	2,691	2,397	1,165	1,084	39	109	49	294
中伊豆町	9,171	6,578	3,717	2,703	43	115	57	2,593
三 島 市	2,660	2,657	1,827	721	62	47	69	3

- 注 1. 各市町とも全域を示す。(図幅外も含む)
 2. 県林政課地域森林計画による。